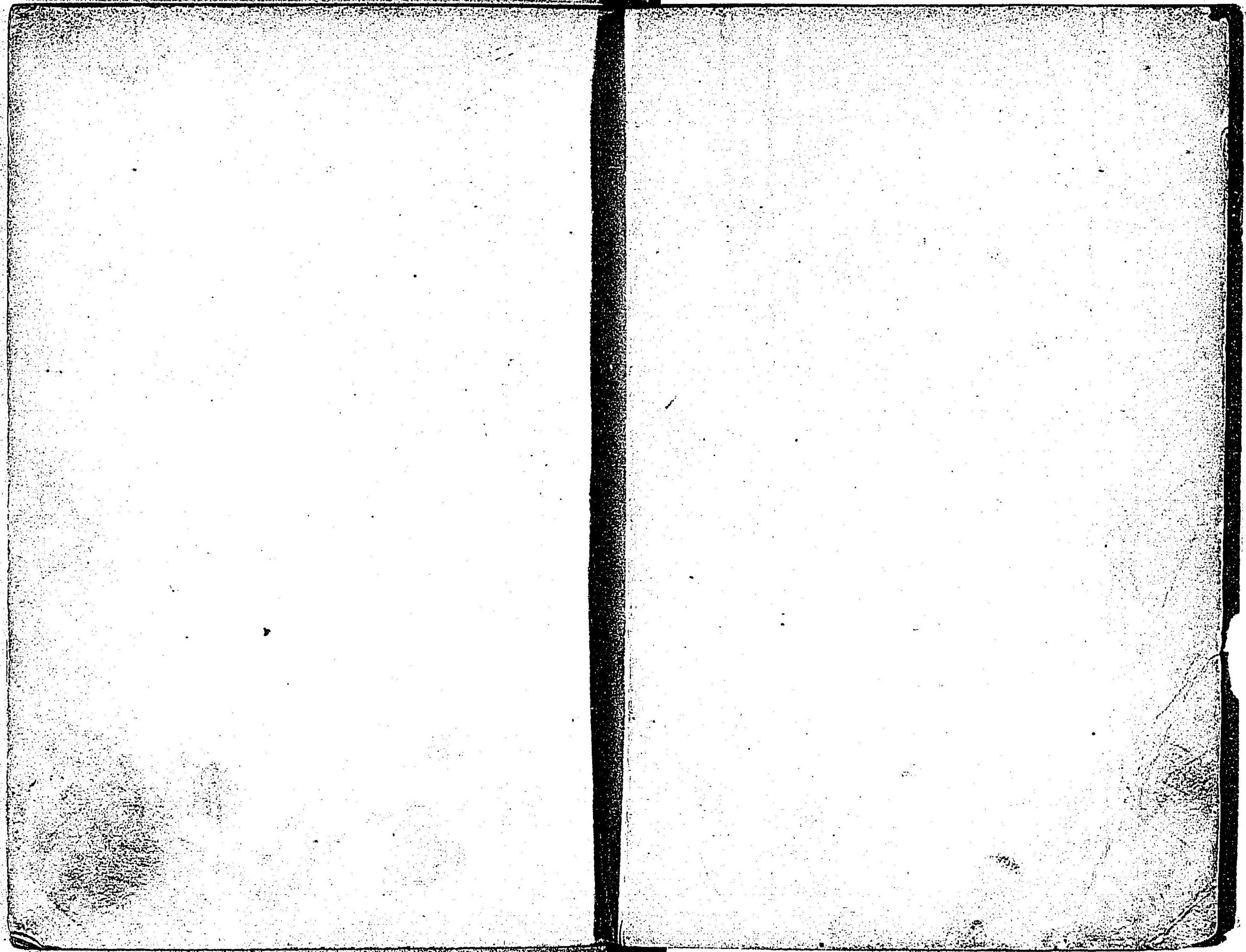
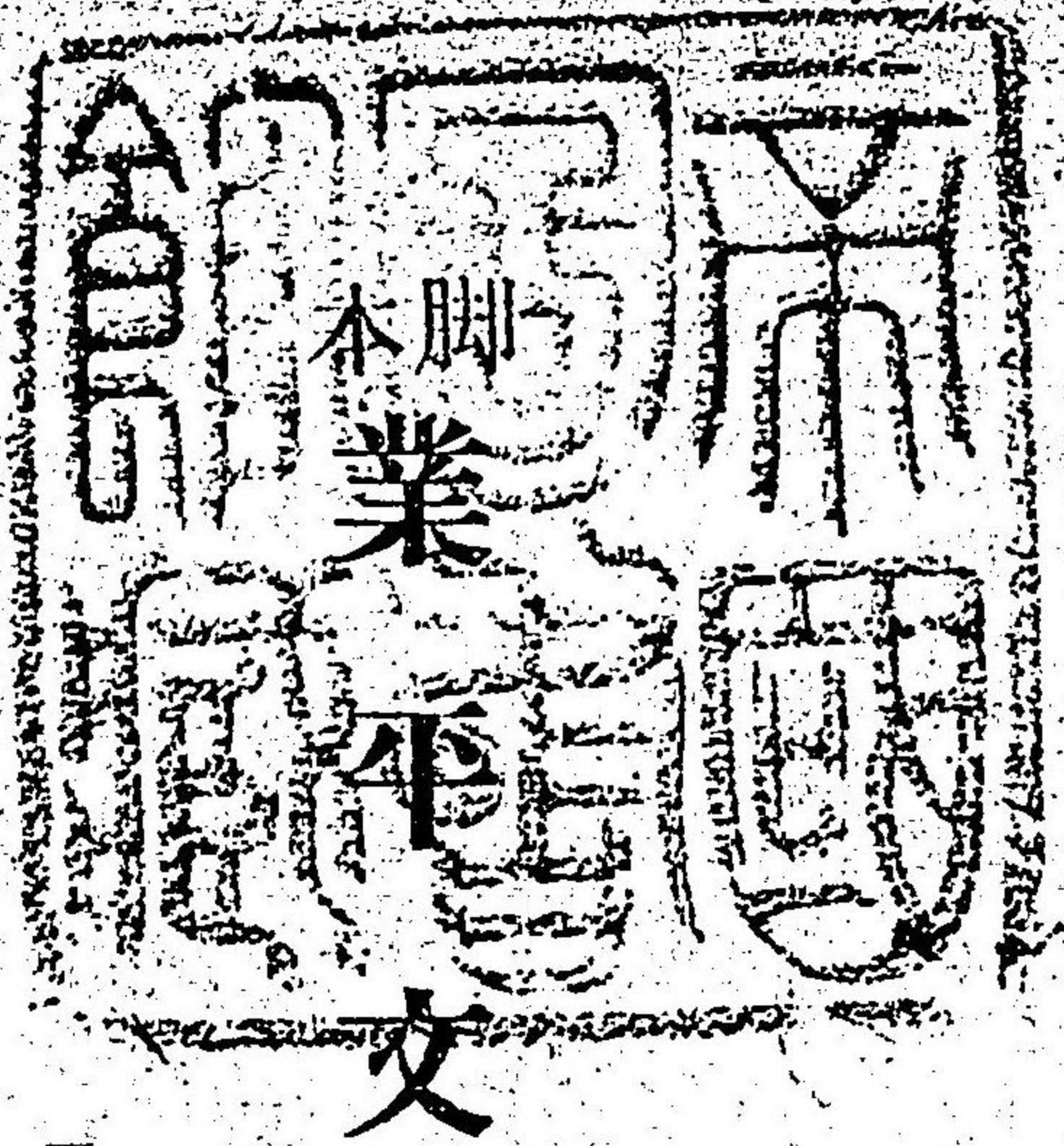


本 姑
業 家 文 法







文治

ちぬの浦浪六
田中霜柳
脚色





伊井容峰

脚業平文治

らぬの浦浪六
田中霜柳
脚色

序幕

柳橋の藝妓屋に情死の約束
吾妻橋の河岸に浪士の最期

登場人名

劍客大伴蟠龍軒、實弟蟠作、門弟阿部忠五郎、醫者秋田
穂庵、紀伊國屋手代友之助、浪人小野庄左衛門、浪者町

式部屋婆々お崎、藝妓市松縞のお村、同お浅、下女お玉
夜番與太郎、番場の森松、左官亥太郎、俠客業平文治、
新内語り二人、船頭二人、

頃は安永九年の夏、柳橋の式部屋と呼べる藝妓屋にて、上座
に大伴蟠作煙草盆を前に不興の躰、少し下りて此家の女主人
崎、續て、藝妓お浅を中に同市松縞のお村、何やらん物憂さ
様子に悄然と打萎れる、此模様意氣な流行唄にて幕開く。

崎 『旦那、お腹の立つは御道理でございますが、身躰ばかり大きく
ツても殻孩子でございますから、情願かお氣にお障へ下さらな
いで、御緩りとお遊び下さいまし』

浅 『妾が來たからツて、那麼に逃出すやうにお歸りなさらなくツて

も宜いじやありませんか』

蟠 『幾ら汝達が止るとも嫌がる者の身邊には片時の間も居度ない、
鹽華とやらを撒れぬ内、ドリヤ』(と言つて傍に置き刀を把て敦圀
暴く立上る)

崎 『飛んだ事を仰やいます、コレお村、旦那がお歸りなさると仰や
るのにお前は何をして居るんだよ』

浅 『村ちゃんは何うして旦那を嫌がるもんですか、誰しも覺えのあ
る通り、好きな人の前じや兎角耻羞みたがるもんでさア、村ちゃん、
早く旦那のお身邊へお出な』

村 『姐さん勘忍しておくんない、先刻から頭痛がしてならないん
だから』

蟠「その頭痛と云ふのも、大分は紀伊國屋の友之助とか云ふ青二才に、仕送る金の工面が出来ない爲だらう、恩知らず奴、二度と此家へ足踏しないぞ」と袖を拂つて縦々と戶外へ立出る、お崎は捨臺詞を云ひながら慌て其跡を追駈來り)

崎「旦那、貴郎がお出くださらなかつた日には此式部屋は空店になつて了ひます、お村には妾から能く云聞かせますから、情願か御機嫌をお直し下さいまし、ねえ旦那、此婆々に免じて最う一度お歸り下さいましな」

蟠「お崎、心配いたすな、今怒つたのはありや嘘だ」

崎「え、狂言を遊ばしたのでございますか」

蟠「あれ程に云はねばともと思つて、一狂言して見たのだが、跡

で汝からも納得する様に云聞すが宜い、然し今日は此儘歸ると致

さう」

崎「流石は旦那様、野暮に怒つたと見せて跡でお笑ひ遊ばす、之れが眞個の粹と云ふもの、歳さへ若くば此婆々も旦那のために一苦勞いたして見たうございますよ」

蟠「煽てくれるな、汗が出るわい」と蟠作は扇子を啓きて胸の邊をあふぎながら、幕開きの流行唄にて花道へ這入る、お崎は屋内に入りて熟とお村を睨めつけ)

崎「お村、お前の剛情には妾も呆れかへつたよ」と云つて以前の座に直り)

崎「金にもならない友之助の青二才と徒痴狂つてるのを、妾が見て

見ない振をして居るは、何のためだと思つて居るのだ、好きな道
樂をさせて置いて可い旦那を取らした上、左團扇の樂隠居がした
いばかりさ、加旃に道樂だけは一人前を過ぎてゐて、旦那を取れ
となると酸の菑弱とアノ通りの始末よ、一體私を何と思つてゐる
のだ』

浅『それを村ちやんだつて忘れるもんですか、義理ある中の阿母さ
んだと云ふ事は、始終妾に云つてお在さ』

崎『だから邪慳だらゐるな事を云つて居るのだらう、其義理ある中
と知つて居るなら、之れまで育てられた恩返しに何故妾を樂にさ
せないんだ、親を親とも思はないで妾の云ふ事を聞かなさや其ま
ゝにして置かないよ』

村『阿母さん、お前の云ふ事は妾や無理と思はないがね、何うもあ
の方ばかりは、蟲が好かないとでも云ふのか死でも嫌だよ』

浅『片方に友之助さんと云ふ情夫があたりだから、爾うお思ひなの
も無理じゃないが、あの旦那だつて別に男振が悪いと云ふじやな
し、金切れも随分奇麗な様子だから阿母さんの云ふ通り、情夫は
情夫、旦那は旦那として嫌でもあらうが承知をおしな』

崎『斷つて肯かなさや親のためにならない者を、何日まで置いても
爲方がないから、宿場女郎に打賣つて二百と三百の纏まつた金に
する分の事さ』

村『女郎に賣られゝば爲方もないが、恚うして居るうちは妾も柳橋
の一本藝妓さ、藝こそ賣るが身軀までは賣りたくないと思つて居

るのだ』

崎『藝こそ賣るが身躰は賣らぬ、生意氣な事をお云ひでないよ、それは立派な藝妓衆の云ふ事だ、お前などは今日此頃藝妓になつて、辛と一人前になつたのも誰のお庇蔭だと思つて居るのだ、亦棚下しをするやうだが七歳の冬に親兄弟もないお前を、七兩の金に貰ひ切つて育てたのだが、飯さへ碌々喰はなかつたと見え骨と皮とに瘦せてゐたのを、妾の丹精で漸やう人間らしくした上、三味線を仕込めば記憶が悪ければかりでなく感所が悪くツて、撥の脊尻に幾ら打つたか知れやしない、踊りを習はせれば突立つてばかり居て、棒を呑むだお化のやうに殻爲様のなかつたを、何うやら斯うやら之れまでに仕上げたも末始終樂がしたいばツかりさ、自

己の好いた男となら、上流くんだりまで往つて寢泊りをして來やがる癖に、身躰を賣るも賣らぬへもあるものか、親の威光で手籠にしても諾と云はせるのだ』

村『そりや餘り邪慳と云ふもの、今までも前に不自由な思ひでもさせて居るなら爲方はないが、云ふなり次第の贅澤をさせてあげて居るじやないか、加旃にお客さへ見れば旦那に取れの妾になれのと、妾や爾う云ふ事が大嫌ひだから、幾ら手籠にされても承知をしないよ』

崎『何處まで太々しい阿魔だらう、承知をしなきや恚うして承知をさせてやるのだ』とち村の襟頭グツと掴むで自己が手許に引寄せ有合ふ煙管取上げて力任せに打たんとするを、お淺は吃驚推止め

て)

浅 『阿母さん、静におしよ、容貌を賣物の村ちゃんに疵でもついたら大變だ、加旃に、人氣稼業の藝妓屋で親子喧嘩は第一世間へ外聞が悪いやね、村ちゃんには妾から意見をして得心させるから、ねえ阿母さん、兎に角この場は妾にも任せなはいよ』

崎 『浅ちゃん止ずに置いて下さいよ、止ると癖になりますから』

村 『打つて承知をするとお思ひなら、幾らでもお打ちよ』

崎 『なにッ』

浅 『あれさ、危いからち廢しと云ふに、村ちゃんも村ちゃんだ、妾が中へ這入つてゐるに、餘計な口をお利きでないよ、さア阿母さん、兩方から互ひに睨み合つて居ちや兎ても結局がつかないから、

奥へお出なはいよ、お前にも妾から些とばかり云ひたい事がある』
崎 『だッて此まじや煙管の手前でも』

浅 『まア可いから、妾と一緒にお出なはいよ』と引立るやうにしてお浅は、正面の瓦燈口へお崎を無理矢理に連れて這入る、お村は跡見送りて長火鉢の傍に座り直し、手に持つ團扇を杖に頸垂れるたるが、力あまりて思はず其團扇を二つに壓折り、ハツと驚かして倏忽また悄然と袖に涙を隠す途端、新内の流しとなりて下手より男女二人の新内語り、三味線を彈流しながら花道へかゝる、此時前頭より芝口の紀伊國屋と云へる袋物屋の手代友之助、腕を組むて悄悄と出來りしが新内語りと行違ひさま、衝と立止まりて花道へ流入る其後姿を熟と見送り、急に氣を取直していそぐと本

舞臺の格子戸前に來り、四邊を見廻して格子の隙より密と屋内を覗きこみ)

友 『お村、お村』

村 『えッ』

友 『私だよ、お村、友之助だよ』

村 『あれ、鳥渡』と云ひながらお村は立つて、奥を氣遣ひながら徐に格子戸を引開け)

村 『能く来て下すつたのねへ、手紙でも出さうかと思つて居る處さ』

友 『退引ならない用事があつて來たのだが、お袋は』

村 『例の奴ていがみ合つて居たを、淺ちやんが中に這入つて、今奥の間へ連れて往つたばかりなの』

業 平 文 治

友 『それじや屋内へ這入る譯にも往くまい』

村 『だつて爰じや話が出来ないし、妾も用事があるのだから、兎も角マア這入ておくんなさいよ』

友 『這入るのは宜いが、若し見附かつちや大變だ』

村 『なアに、些との間ぐらゐは大丈夫よ』と言つてお村は友之助を引入れて)

村 『急に逢ひたいと思つて居たところ、眞個に能く来て下すつたね』

友 『那麼事は何うでも宜いが、私の用事より差當つてお前の用事と云ふは、全躰甚麽用事だ』

村 『なに、妾の用事』

友 『爾うさ、早く聞かせなさら』

序

幕

村 『その用事と云ふは』

友 『うむ、何だ』

村 『友さん』

友 『えッ』

村 『妾や死で了ふ心算でござんす』

友 『な、なんと云ふ』

村 『恠う云つたばかりでは、定めしお驚きでござんせうが之れには深い譯のあること』

友 『そ、その譯と云ふは』

村 『常々お前さんにも話して居る通り、あの割下水の大伴蟠作さんと云ふお客が、阿母さんの慾に目のないを手に入れて、妾へ種々

と云ふけれど何日も素氣なく跳つけて居た處、今夜も阿母さんが怒り出して、蟠作さんを旦那に取らなさまや宿場女郎に賣るとの事、若し勤めに出来れば是れツきりでお前さんに再び逢へる氣遣ひはなし、假令女郎に賣られないまでも、阿母さんの身邊に居ちや彼の客を旦那に取れの此客の妾になれのと、暇さへあれば責立らるゝ身の辛さ、加旃に義理の悪い借金もあり、且つはお前さんと夫婦になれなさまや他の藝妓衆にも外聞が悪いから、該れや之れやで寧ろ死でと覺悟を極めたのでござんすが、死ぬ前に情願を一目お前さんに逢ひたいと思つて居たところ、神の助けか佛の加護か、眞個に能く来ておくんないました』

友 『それじゃ眞個に覺悟を極めたのか』

村 『嘘に這麼事が云はれませうか、今宵のうちに向島から人手要らずの水葬禮、翌日は何處かの海へ流されて魚の餌食になりませう、然し妾の死ぬのは妾の心柄で爲方もないが、妾の亡くなつた其跡で、定めしお前さんには情婦も出来やう、亦内儀さんもお持ちだらうが、此柳橋の女だけは廢して下さい、外の花柳では關はないが爰でお前さんに浮氣をされちや、妾や死でも浮ばれませんよ』

友 『浮氣どころか此友之助も、今宵を名残の敢ない命』

村 『なんとお云ひなさんす』

友 『お村、私の用事と云ふも實は此世の暇乞ひだ』

村 『えッ』

友 『何うした縁か去年の暮から、お前と憊うした中になつて、主人

の金を我物のやうに、思はず知らず二百六十兩あまり遣ひ込んだが、元帳を預かつてゐるを幸ひに甘く今日までは胡魔化して來たなれど、此頃になつて何うやら主人の薄々それと曉つた様子、その上に今朝藏前の得意先へ、八十兩と云ふ金を受取に往つた歸り途、何處で落したか拘られたか、日本橋まで來ると八十兩の影も形もないに吃驚仰天、むかしの友之助なら落したで分疏は立つが、今の我身じや兎ても主人が承知をすまいと思つて、其金の調達に懇意の先々を駆廻つてみたなれど、折の悪い時は百の錢さへ貸してくれず、と云つて主家へ歸れもせず、爲方がないから御主人には濟まないが寧ろその事にと覺悟を極めて、實は夫となく暇乞ひに出て來たのだ』

村『それじゃお前さんも今夜のうちに』

友『死で主人へお詫をする心算だが、お前も爾う云ふ量見なら、私と一緒に向島から浮名を流してくれまいか』

村『嬉しうござんす、妾もお前さんを跡に遺して死でゆくを、何だか心残りのやうに思つて居たが、お前さんと一緒に死ねるなら、死で死華が咲くと云ふもの、さア友さん、早く用意をしておくん
なさい』

友『いや、御主人へ少し書遺して置きたい事があるから、今と云ふ譯にも往くまい、亥刻の鐘を相圖に長命寺の前で出會ふとせう』

村『そんなら信と忍んで往きますから、待て居ておくんなさいよ』
友『待つてゐるとも、一人て死で成佛が出来るものか』と云ふ折し

も正面の瓦燈口より、下女お玉出来り)

玉『姐さん、内儀さんがお呼びなすつて在らっしゃいますよ、おや、

友之助さんでございませうか、お久振でございませうね』

友『何日も元氣で結構だの』

村『玉、友さんの入らした事は、阿母さんに内證だよ』

玉『那麽事は承知いたして居りますよ』

村『その替りに之れをあげるから、仕舞つてお置さ』と云ひつゝお
村は自己が頭に挿したる釵を抜きてお玉に渡す)

玉『おや、這麽結構な物を戴いて、姐さん、有難うございませう』

村『なんだね大きな聲で、奥へ知れると可けないよ』

友『じゃお村、今の事は』

村「倍とでござんすよ」

友「念には及ばぬ、玉ちゃん、壯健でも暮しなさいよ」と云つて友之助は戶外に立いで、縦々と足早に下手へ這入る、此時またも正面の瓦燈口より婆々お崎、大聲にお村、お村と、呼びながらお淺と共に出來り」

崎「お村、先刻から呼んで居るのが、お前の耳にや這入らないかえ」

村「能く聞こえてゐますよ」

崎「聞こえて居るなら返辭をしな、何につけても一度や二度では納らない餓鬼だ」

淺「あれさ、今も奥で云つた通り、其毒口はお廢しなさいよ、ねえ村ちゃん、阿母さんには種々と話をしたのだが今度はお前さんの

番だ、爰で云ふも可笑いから遊びかたがた妾の宅へお出な

崎「一緒に往つて、淺ちゃんの云ふ事を能く聞いて來なよ」

村「それじゃ姐さん、お供ませう」

淺「あい往させませう、阿母さん、それでは村ちゃんを借りましたよ」

崎「眞個にも世話様でございますね」

淺「なアに、之れが妾の道樂さ」と云つてお淺はお村を連出し、矢張り幕開きの流行唄にて花道へ這入る」

崎「例もながらの剛情亞魔に餘り腹を立てた所爲か、スツカリ肩をこらして了つた、玉や、氣の毒だが少し肩を叩いておくれよ」

玉「承知いたしました」とお玉は立つてお崎の肩を叩き初める、同時に花道より浪人小野庄左衛門、兩眼の見えぬ思入れに杖を突き

て、按摩笛を吹鳴しながら躰裁悪げに出来る)

崎「玉や、戶外へ按摩が来たやうだ、呼んでおくれな」

玉「はう」と急いで戶外へ走りいで、)

玉「鳥渡、按摩さん、爰だよ、按摩さん」

庄「俄盲目で感が悪いものですから、這方でごぞいますか」

玉「爾うだよ、手を把つてあげるから、さア手をお出し」

庄「有難うございます」と言つて庄左衛門はお玉に手を引かれて屋
内に入る)

崎「按摩さん、氣の毒だが肩が凝てならないから上を揉でも呉れな」

庄「委細承知致しました」

崎「ちやく、大層むつかしい按摩さんだね」

庄「此稼業に馴れないものでござるから、何と申して宜しいやら、
様子の程が判りませぬ」

崎「じやお前さんは素人だね」

庄「云はゞ素人も同然なれど、聊か柔術の一手を辨へ居りますれば、

お肩の痛みは倍と揉和げて進ませせう」

崎「柔術按摩とでも云ふのだね、下手な按摩さんよりは利くだらう、
さア遣つておくんな」

庄「はい」と之にて床左衛門はお崎の肩を揉みにかゝる、爰へ花道

より割下水に劍術の町道場を開く大伴蟠龍軒、門弟の阿部忠五郎
を引連れ、賑やかな鳴物入の唄にて徐々と出来る、忠五郎は衝と

進みて格子戸を引開け)

忠 『お崎、在宅か』(と大聲に叫ぶ、お玉は駈出て忠五郎を見るより大聲に)

玉 『おや、阿部さんで在らっしゃいますか』

忠 『割下水の大先生がお越した』

玉 『えッ』(と驚きお玉はお崎の身邊に駈來り)

玉 『内儀さん、阿部さんが割下水の大先生のお供をしてお出になりましたよ』

崎 『なに、割下水の大先生、そりや大變だ、按摩さん鳥渡待つておくれよ』(と云つて四邊を取片附ける處へ、蟠龍軒は忠五郎と共に入來る)

崎 『おや旦那、お久振でございましたね』

龍 『お崎か、何日も壯健で結構だ、直ぐに歸る心算だから關はずに置くが可い』

崎 『爾う仰やらすに、御緩りとお遊び下さいまし、按摩さん、折角だが今夜は歸つて、亦翌日の晩にでも來ておくれな』

龍 『別に遊に來たと云ふ譯でないから、心任せに揉んで貰ふが可い』

崎 『でも旦那の前で、餘り失禮にございます』

龍 『何さ、無用の遠慮致さずと早く療治をさせるが可い』

忠 『大先生が粹を利かして彼様に仰やるのだ、それを無暗に遠慮するは反つて宜しくあるまい、肩なと腰なと勝手次第に遣つてもらひなさい』

崎 『それではお言葉に従ひまして、旦那、御免くださいまし、お玉、

お前は淺ちやんの處へ往つて、お村を大急ぎに連れて歸つておい
て』

玉『宜しうございます』

崎『さア、按摩さん遣つておくれ』とお崎は再び床左衛門に肩を揉
せる、お玉は花道へ往く、前頭より床左衛門の娘お町うろくくと
して出來り、お玉と擦違ひに衝と其身邊へ進みより耻しげに)

町『つかない事をお伺ひ申しますが、若しや此邊へ、年の頃は五十
二三の俄盲目で、浪人風の按摩が参りは致しませんでございませ
うか』

玉『その按摩さんなら、妾の宅で内儀さんの肩を揉んでお在さ』

町『和女のお宅と申しまするは』

玉『それ、其處の式部屋と云ふ藝妓屋さ』

町『有難うございます』と之れにてお玉は花道へ這入る、お町は本
舞臺に來りて格子戸を密と引開け)

町『御免くださいまし』

崎『あい、何誰だえ、お這入んなさ』

町『誠に申上げかねますが、此宅へお療治に参つて居ります者へ、
松倉町の宅から迎ひに参つたと仰やつて願ひたうございます』

庄『えッ』

崎『按摩さん、お前さんの事だらう、最う宜いから歸つておくれ』

庄『いえ、拙者は松倉町に住居を致しません、加旃に獨身者でござい
いますから、大分人違ひでござりませう』

町 『爾う云ふも聲は阿父さん、御免遊ばせ』とお町は屋内に入り

町 『阿父さん、町でございます』

庄 『娘か』と庄左衛門は上手へ逃んとす、お町は其裾を押へて

町 『阿父さん、なぜ、這麼も情ない事をなすツて下さいます』

庄 『面目ない、許してくれ』

町 『二三日以前から柳島の妙見様へ、眼病の平癒なすやう祈願をす
ると仰やつて、夜毎にお出かけ遊ばすを若しやと思つて居ました
なれど、賃仕事のいそがしさに其まゝ今日まで過ごしましたが、
今宵こそはと見え隠れにお跡を跟けて参れば案の定、柳島の方へ
はお出遊ばさないで大川の河岸傳ひに、笛吹鳴して導引採療治と
流して歩き遊ばす情なさ、妾は餘りの事に人目も介意はず聲を

あけて、兩國の橋際に暫らく泣いて居りましたが、其うちにお姿
を見失ひましたから、往來の人に尋ね尋ねて漸やう此宅へ上りま
した、妾が男であるなら怪我にも這麼御苦勞をおさせ申しません
が、何を云ふにも女の身のうへ、賃仕事さへ思ふやうに出来兼て、
苦しい生活をおさせ申す夫故の事と思へば、妾や刀で斬られるや
うでございます、阿父さん、勘忍して下さいまし』

庄 『少しなりとも手助けをしたいと思ひ、お前に隠れて這麼事をし
たのだが、決して悪く思つてくれるな、世が世であれば、娘盛り
のお前に斯かる心勞いたさせないが、重役の讒言に浪人して長の
貧乏の其上、妻には死別れ此身は眼病、苦しい中から算段して呑
んだ薬の効力なく生れもつかぬ盲目となり、何にも知らぬお前に

まで非人に劣つた生活をさせるは、我ながら愛想の盡きた厄介親爺、これも何かの因縁事と諦めて許してくれよコレ娘』

町『勿躰ない事を仰やつて下さいますな、まア妾としたとが、餘りの悲しさに他人様のお宅とも辨へず、我を忘れて思はぬ身の述べ懐、さぞ無遠慮な奴と御立腹でございますうが、皆様、情願かお許しなされて下さいまし』

庄『成程松倉町の我家ではなかつたの、之は飛んだ失禮を致した』

崎『冗談じゃないよ、お前様達の貧乏長家と同一にされて耐る物か』

庄『悪い事を申した、平に御容赦を願ひます』

崎『容赦も香車もない、縁喜稼業の藝妓屋で面白くもない愁嘆話を』

あッ初めて、第一お客様の在らッしやるのが判らないのかい、さ

ア、療治代をあげるからサツサと歸つておくれ』

町『阿父さん、彼様に仰やいます、早くお立ち遊ばしませ』

庄『お、』と云つて庄左衛門は稍や立腹の躰に立上り』

庄『流石は稼業の泥水根性、慈悲も情も』

崎『なんだとお云ひだ』

庄『いや心ばかりの禮がはり、療治代はお受け致さん』とお町に手を引れながら戶外へ出んとす、大伴蟠龍軒は此以前よりお町の姿に見惚れゐたるが、遽に膝を乗出して聲高く』

龍『あいや御浪人、暫らく』

庄『拙者でござるか』

龍『如何にも、御迷惑と存じて長くは止め申さん、暫らくの間』

れへお直り下されたい』

庄 『うむ』と庄左衛門は以前の座に直りて』

庄 『何か御用がござるか』

龍 『いや、御息女の御孝心に感服いたして、待冥利に此後の御懇意を願はんため、お呼止め申したのでござるが、拙者事は割下水に道場を開きて、剣道の指南を致す大伴蟠龍軒と申すもの』

忠 『また拙者は其門弟にて、阿部忠五郎と云ふ未熟者でござる』

庄 『何事かと思へば、尾羽打枯らした素浪人へ改まつたる御挨拶、拙者も姓名を名乗る筈にござりますれど、少し仔細あつて今暫らくは唯だ此まゝ、松倉町の按摩としてお見知置さとお願ひ申す』

龍 『斯くまでお成りなさるには就れ仔細のあるべき事、強いてお尋

ね申すまいが、然し、見受くるところ長の御流浪に、萬事御不由の御様子にござれば、近頃失禮とは存ずれど持合せの金十兩、これを何かにお遣ひくださらば拙者も實に喜ばしうござる』と云つて蟠龍軒は金包みを差出す』

庄 『見ず知らずの拙者に十兩と云ふ金をお恵み下さるは、御親切のほど誠に辱なうござるが、戴くべき筋なくして戴く譯にも参りませ

すまい、お志は頂戴いたしますが金子は其儘御返済を致します』
龍 『世の比喩にも云ふ通り武士は相身互ひとやら、左様な御遠慮をなさらずと情願かち收め下されよ』

庄 『なんと仰やつても此金ばかりは、戴き申すことが出来ません』
龍 『それでは改めて御息女に』

庄 『娘とても、縁のない貴殿より金子を戴く譯がござらぬ』

町 『阿父さんは此通りの頑固でございますから、貴卿の御親切を無に致し、定めしお氣にも障へなされたでございませうが、情願か悪く思召さないで下さいまし』

龍 『いや武士たるものは、兎角に斯くありたきものでござる、蟠龍軒、益々感心いたしました』と云ふ折しも下手より醫者秋田穂庵、足早に出来りて屋内に入り

穂 『先生、此宅にお在でございましたか』

龍 『うむ、穂庵老か』

忠 『爰と云ふ事が能く知れたの』

穂 『そこは蛇の道、お跡を嗅付けて参りましたが、愚者を出抜いて

の藝妓屋遊びは、穂庵近頃ちとお恨みに存じまする』

龍 『遊びに参つたのではない、弟の蟠作を尋ねに来たのだが、之れなる御浪人にお逢ひ申して、圖らず長座を致して居つたのだ』

穂 『左様でございましたか』と穂庵は庄左衛門を見てハツと驚き

穂 『やッ、貴卿は松倉町の小野庄左衛門さま』

庄 『妙な處でも目にかゝりました』

穂 『お娘御も御一緒でございますか』

町 『はい、其後は御機嫌宜しう』

穂 『貴卿方もお壯健で結構結構、いや先生、かねてお話を致しましたは此娘御でございます、貧に窶れてお在なされるが、なんと好い御容貌ではございませんか』

龍 『それでは之れなる御浪人の御息女が、汝の話の娘御であつたか』

忠 『先生、ますます御執心でございませう』

庄 『ア、いや穂庵殿、貴殿を以て度々娘を妾にと所望いたされたは、

あれなる御人でござるか』

穂 『左様でございます、爰でも逢ひなされたが結ぶの神の盡させぬ

御縁、萬事の御相談をなされては如何でございますな』

庄 『左様な事は聞くも汚らはしうござる、町、歸らう』と庄左衛門

はお町に手を把らせて憤然と立上る、忠五郎は其身邊に進みより

て彼の金包みを差出し』

忠 『御浪人、先生の心も籠められた此金子は』

庄 『瘦せても枯れても往時は中川山城守が家臣、如何に落魄なせば

とて金に娘を賣り申さぬ、手に觸れるさへ無念でござるわ』と庄

左衛門は悔しげに其金を取つて、忠五郎に磔と投つける、之れを

木頭にて、穂庵は忠五郎が刀の鞘に手をかけるを推止め、お町は

庄左衛門の袖を曳きて歸りを促す、此模様賑やかなる流行唄にて

ツナギ幕)

更渡る夜の沈々と物凄き吾妻橋の河岸通りにて浪音に幕開く

と、下手より夜番與太郎頼冠りをして亥刻の太鼓を叩きなが

ら出来る、此時本舞臺の隅に睡りぬたる犬一匹、たちまち起

上りて吠かゝるに、與太郎は驚き下下手へ逃こむ、犬も亦を

の跡を追駈けて下手へ這入る、直ぐ本釣になりて上手より小

野庄左衛門、娘お町に手を引れながら出来りしが、舞臺中程

にて小石に躓き撞と倒れて草履の鼻緒を切らす、

町「あれ、阿父さん、何う遊ばしました」

庄「石に躓いて轉んだのだが、いや、別に怪我も致さぬやうだ」

町「それは宜しうございました、此大川端は石片が澤山ございますから、お氣をお付け遊ばしませ」

庄「江戸の街は、伊勢屋稻荷に犬の何とやら云ふが、此庄左衛門に云はせると、伊勢屋稻荷に石片だ」

町「眞個に左様でございますね」

庄「やッ、轉んだ拍子に鼻緒を切らしたやうだ」

町「それは困つた事でございます」と云つても町は手探りに庄左衛門の草履を取上げ

町「なるほど前坪が切れました、鳥渡たてやうにも眞暗闇で爲方がございせんから、阿父さん、妾の草履をお穿き下さいまし」

庄「いや、お前に跣足で歩かせて、若し怪我でもさせた日には大變だ、此まゝで往く事に致さう」

町「爾うではございません、貴卿の眼病も原因は寒氣からだと穂庵様が申して居りましたから、跣足でお歩き遊ばして此上また御病氣にお罹り遊ばしたら、町の嘆きが何れ程と思召します、さア情願でお穿き下さいまし」

庄「親甲斐もない此身を氣遣つて、それほどに云ふてくれるは嬉しいが、穿かぬと云へば穿かぬから、最う二度と申してくれな」
町「それでは斯様に致しませう、外手町に妾の知邊がございませうか

ら、其處へ往つてお召物を借りて参りませう』

庄 『外手町と云へば、跡へ引返さねばなるまい』

町 『引返しました處が、僅二町足らずの道でございますから、直ぐに往つて参ります、暫らく爰でも待ちなすつて下さいまし』

庄 『氣の毒だの』

町 『我子に遠慮を遊ばしますな』とお町は裾を端折りて小走りに上手へ這入る、爰へ上手と下手の樹蔭より、大伴蟠龍軒と阿部忠五郎の兩人忍び足に出来りて、刀をスラリと引抜くや否や物をも云はて庄左衛門に斬つてかゝる、之れにて三人暗闘模様立廻りとなりしが、蟠龍軒は遂に庄左衛門を殺害して、青草胴亂仕立の煙草袋を落せしとも知らず、忠五郎と共に悠々と下手へ這入る、途

端に平舞臺の大川へ下手より網船一艘、俠客業平文治と乾兒の森松を乗せ船頭二人にて漕出来りしが、森松は舳先に立つてサツと投網を打入れ、藝妓お村の死骸のかゝりしに顔色かへて打驚く、此時上手より左官の棟梁亥太郎出来りて、蟠龍軒の煙草袋を拾上げる、同時に紀伊國屋の手代友之助、平舞臺の水中より頭を擡げて、上手寄の亂杭に取継りながら、カツと水を吐出すが木頭、文治は舳先に立出てお村の顔を見る、之れを佃に浪音かすめて幕

(二幕目)

侠客の數寄屋に淫婦の艶言
業平町の長家に不意の珍客

登場人名

侠客業平文治、同母親鼎、紀伊國屋手代友之助、同女房
お村、左官次太郎、眞假名の國藏、同女房お浪、番場
の森松、浪人藤原喜代之助、同母親政江、同女房お淺、
物頭役中原岡右衛門、長家女房お北、同お咲、丁稚長吉
若徒一人、仲間一人、
贅澤ならねど風流を極めし業平文治の茶室にて、文治しづか
に茶を點じ居ると、下手に左官の亥太郎窮屈らしく座りゐる、

此模様鼓子の調へにて幕開く。

亥「旦那、俺なんざ壁塗る事は知つて居ますが、茶を飲む事は知り
ませんから、那麽面倒臭え事をしねえて、グツと一杯冷酒でも戴
きたいもんでサ、這麽下司野郎には反つて其方を喜びますぜ」

文「茶は飲みたくないと言ふか」

亥「折角の御馳走ですが、何しろ憊うして居ちや馬鹿に窮屈で、今
にお薬を戴くやうになるかも知れませんが、宛然で命がけの仕事
だ」

文「餘程辛いと見えるな」

亥「辛いも苦しいも、這麽責苦に逢つた事がありません」

文「それじゃ、之れで廢さう」

亥 『お廢し下さいますか、有難うござります』

文 『御馳走を廢して禮を云はれたは、之れが初めてだ』と云つて文治は、茶道具を傍に取片附け)

文 『なんか用事でもあつて來たのか』

亥 『實は見附前のお禮に參りました』

文 『なにッ』

亥 『丁度今日で二月餘り、俺が淺草の見附前で、酒屋の親爺を敵手に喧嘩をして居た處へ、通りがりの旦那様が、中へ這入つて種々と仲裁して下さつたも、酔つた紛れの向ふ見ずに今度は旦那を敵手として、死物狂ひの喧嘩を初めたが、力づくでは兎ても敵はぬ苦しまざれ、見張所の中へ飛込めて飾道具の鐵砲を持出した處、

御承知の通り見附役人に取つて押へられ、一も二もなく傳馬町の大牢へ御隠居さ、五十日目に數も五十の叩き拂ひで、悄悄自宅へ歸つて見ると、俺の入牢中に十兩の見舞金を下すつたと親爺が喜んでの話、これを聞いた時には、旦那、俺も腹の底から感心しましたぜ』

文 『別に感心いたすに及ぶまい、喧嘩は喧嘩、義理は義理だ、幾ら汝と喧嘩を致したからと云つて、跡に残つてゐる老人の難澁を棄置く譯にも往くまい、それで見舞金を遣はしたのだが、之れは世間の義理と云ふものだ』

亥 『サ、其處だ、其處が普通の人間には出來ねえ仕事だ、幾ら奇麗に交際つてゐても、一度喧嘩をすりや、何にも知らねえ其親や兄

弟までを憎みたがるが人情さ、それに引替へ旦那のは、不憫を加へて金まで恵むて下さるんだ、甚麽奴だッて、之れが感心せずにおられませうか、旦那のためなら俺は命までも棄やすぜ』

文『うむ、勿々感心な男だ、僅十兩の返禮に、命をくれると云ふなら貰つて置かう』

亥『旦那のお望みなら何時でも、さア、お斬りなすッておくんなさい』(と亥太郎は我手に、自己が頸の邊りを打叩く)

文『いや斬らないで其まゝ貰つて置く、貰つたとすれば汝の命でない、之れからは私の物だと思つて粗末にせず、餘り喧嘩などを致さないが宜い』

亥『有難うございます』(と兩手を支えて頭を下げる、此時俄に聖天

囃しの音にぎはしく聞ゆ)

亥『ちや』

文『今日は龜戸天神の祭禮なれば、山車でも通ると見える』

亥『左様でございますか、それでは之れでも暇致します』(と云つて亥太郎は、庭の飛石傳ひに下手へ這入る、同時に二重の正面なる襖を開きて、文治の母親鼎しづかに出來り)

鼎『文治』

文『阿母様でございますか、幸ひお湯が沸いて居りますから、一服おたて申しませう』

鼎『いえ、戴いた處で、今は咽喉へ通りませう』

文『何處か悪いのでございますか』

鼎 『身軀に病氣はなけれども、心の病氣が絶えぬ故』

文 『なんと仰やる』

鼎 『假令何のやうな事があらうとも、喧嘩はならぬと申してあるに其戒めを打破りて、お前は亥太郎とやら云ふ者と喧嘩をしましたね』

文 『それでは、唯今歸つて往きました亥太郎と申す奴の話は、和女はお聞き遊ばしましたな』

鼎 『圖らずも次の間で、手に取るやうに聞いて居りましたが、改めて妾の云ふまでもなく、此浪島の家は尾張様の古い家柄にて、御先祖以來御用人頭をお勤め遊ばし、千二百石を頂戴致して居りましたも、十年以前に御病死なすつた良夫文吾左衛門様が、生れつ

いての頑固に御重役とお争ひを遊ばして、遂に此通り浪人となりましたが、何うかして以前の家名を起したいと、妾は寝た間も忘れた事のないに、お前はそれを何とも思はず、明暮れ喧嘩の出入のと、武士の果にあるまじき物争ひ、業平とやら有らぬ異名を唄はるゝを宜い事にして、少しも家名再興を謀らぬは、武士を捨て此まゝの浪人で終る量見で居なさるか』

文 『左様な譯でございせんが、何を云ふにも武運つたなく致して思ふ如くになりませぬば』

鼎 『それで狭客とか呼ばれて、人と喧嘩をしなさるか、自己の品行を慎まらずして、何うして武運が榮えませう、若しまた身軀に傷ても受けたら何としなさる、世の教草にも自己の身軀に傷をつけぬ

を、親へ孝行の第一とさへ云ふてあるに、命を棄物の喧嘩三昧、先祖のお位牌に泥を塗りて親へは不孝、それも常より戒めてなければ未しもなれど、厳しく申してある筈なるに、妾の言葉を打忘れて、あの亥太郎とやら云ふ者と何故喧嘩をなすつたのだ、良夫が生きてお在なされたら、之れまで妾を侮りは致すまいに、母一人と輕蔑りて能くも喧嘩をなすつたね、不孝の罪、以後の懲しめ恚うして性根に入れて上げる』と鼎は文治の襟頭取つて身邊に引寄せ、拳を固めて丁々と打据ゑる、爰へ下手より紀伊國屋手代友之助、彼の市松縞のお村を連れて出來りしが、此體を見るより吃驚して中に分入り)

友『御隠居さま、お待ちなすツて下さい』

村『日頃御孝行な旦那様が、何う遊ばしたか存じませんが』

友『私捫夫婦に免じて、暫らくお待ちなすツて下さい』

鼎『友之助殿にお村殿か、決して止めずに置いて下さい』

友『那麼事を御意あそばさずに情願かお許しなすツて下さいまし、旦那の御氣性で、恚うして御折檻をお受けなすツて在らッしやるは能く能くの事があつたのでございませう』

鼎『お前さん方は御存じないが、妾の云ふ事が、之れの性根に入るまでは、打つて打つて、打据ゑるのでございませう』

村『爾うでもございませうが、妾共に取りましては大恩のある旦那様でございませうから、斯様に御折檻を受けてお在あそばすを、見てゐる譯には参りません』

鼎『いや〜二度と申して下さるな』

友『旦那を御打擲あそばして、それで御隠居様のお腹立が治りますなら、さア、情願か此友之助をお心ゆくまで御打擲ください』

鼎『お前さんを打ッて爲方がありますものか』

友『それでは旦那をお赦し下さいますか、旦那をお赦し下さらず、私をも御打擲くださらずば、御隠居さま、御免ください』と友之助は、何處へか駈出さんとす

鼎『これ友之助殿、血相かへて何處へ往かれる』

友『二月以前に、之れなる村と向島より身を投げて、黄泉の人になります處を、旦那がお助け下さって、御主人へのお詫言ばかりか、お村とも慇うして夫婦にして下さったのでございますが、元を云

へば無い命、ふたゝび川へ身を投げて、和女へ旦那のお詫を致す

覺悟でございます』

鼎『友之助殿、待つて下さる』

友『いえ、お待ち申しません、村、お前も一緒に覺悟をなさる』

村『はい』

鼎『まア、待つて下さる、お待ちなさいと云ふに』

友『それでは旦那をお赦し下さいますか』

鼎『赦し難い奴なれど、お前さん方に免じて許してやります』

友『お赦し下さいますか、お村赦して下さるとよ』

村『能く御勘辨下さいました、之れで妾達の命も助かります』

鼎『文治、お二人の真心に絆されて、今日は赦しますが、此後喧嘩

などをしてはなりませんねど、母の言葉を忘れぬやうに』(と鼎は何をか考へて、脊後より硯箱と縫針を取出し)

鼎『こゝへ手を出しなさい』

文『はい』(と差出す文治の腕に鼎は母と云ふ字の入墨をなす)

文『阿母様、これは』

鼎『唐土の魯仲連が例に習つて、妾の心を入墨の假令消ゆる事あるとも、此母と云ふ字を忘れてはなりませんねど』(と云つて鼎は立上り、正面の襖を開きて入る)

友『旦那、圖んでもない入墨が出来ましたね』

文『之も我身をお案じ下さる親の情だ、今日からは倍と品行を慎みます』(と云ふ處へ下手より、番場の森松出来りて)

森『友之助さん、お宅へお客がお出なすつたと云つて、近所の方が

迎ひに来ましたよ』

友『御苦勞様でした、それじゃ直ぐに歸りませう』

村『妾も往きませうか』

友『お前は跡からにするが宜い、旦那、これでお暇いたします』

森『さアお出なさい』(と森松は友之助の後について下手へ這入る)

文『種々とお前方に心配をかけて、濟まなかつたの』

村『何う致しまして』(とお村は、風呂敷包みの小鉢を取出し)

村『今日は良人が一緒に伺ふと云ふものですから、大層遅くなりましたが、酢貝を持つて参りました』

文『那麽事は廢してくれるが宜い、男世帯の何かに不便だらうと云

つて、毎日々々慥うして副食物を持つて来てくれるは有難いが、
相當に金も要るであらうし、且つ商賣をして居て、お前が歩い
ては第一家事の妨げにもならうから、今日は爲方がないとして以
後は廢して貰はう』

村『これが御恩返しごおんがへの萬分一まんぶんでございますから、爾さう仰おつしやらずに、
情願じやうがんか、召喚めしあがつて下くださいまし、加藤かたてに今日けふのは妾めかけの手拵てしぢへてござ
います』

文『實じつに氣きの毒どくだね、然しかしお前まへの手拵てしぢへとは辱かたじけない』

村『何どうせ、あいしくはございますまいが、御幸ごしんぱう抱まなすツを召喚めしあがつ
て下くださいまし』

文『あ、喰たべるとも、だがお村むら、お前まへも柳橋やなぎはしでは評判ひやうばんの藝妓げいしやであつ

たさうだが、思出おもひだすと丁度てうど二月ふたつき以前いぜん、友之助とものおすけと情死じやうじつして吾妻橋あづまはしの
下流しもながへ流ながれて來きたを、私わたしの網船あみぶねへ助たすけ揚あげて初はじめて顔かほを見みた時ときに
は、嗚呼あゝうつ美しい女をんなだと思おもつたよ、其時そのときの姿すがたは今いまに忘わすれない』

村『容子ようすの宜いい事ことを仰おつしやいます、妾わたしのやうなものを美うつくしいなど、仰おつし
やつては、間まが悪わるくツつて氣きが詰つまりますよ』

文『いや眞個ほんごに美うつくしい、美うつくしいものだから慥かうして拙者てまへの處ところへ遣やつ
て來くるを、長家ながやの者ものが拙者てまへの隠かくし女をんなのやうに云いつて居ゐるさうだ、
之これからは餘あまり來こないやうにして貰もらひたい』

村『それでも此宅こちちへ伺うかがひませんと良人やどに叱しかられるのでございますも
の』

文『お前まへの來きてくれるは嬉うれしいが、爾さう無暗むやみに出歩いでいては跡あとに残のこつ

てゐる友之助の心持が快くあるまい、加旃に拙者はまだ獨身であるから、若し友之助が妬氣でも起しはしまいかと、私に心配いたして居るのだ』

五八

村 『あら、彼様事を仰やいます、何て良人が妬氣なんぞ致すものですか、情死したのを旦那のお蔭で助かつて、小間物店の一つも出せるやうにして戴いたのでございますから、旦那が妾を圍妾にてもと仰やれば、良人は直ぐに承知を致しまして、妾を此宅へ連れて上がりますよ』

文 『流石に以前が以前だけ、勿々うまい事を云ふの、那麽事を云つて、拙者が若し冗談でも云ひかけたら、お村、お前は何とする』
村 『妾なんぞに冗談を仰やつて下さる氣遣ひもありますまいが、若

し仰やつて下されば、妾はそれで本望でございます』

文 『それが世辭の甘い處だ』

村 『お世辭でも何でもございませぬ、心から云つて居るのでございませぬが、眞個に旦那のやうな優しい方はございませぬよ、貴郎となら、妾は甚麽苦勞をしたつて介意ひませぬ、ねえ旦那』と云つてお村は、四邊を見廻しながら文治の膝に凭れかゝらんとす、
文治は驚きして开を突退け』

文 『お村、二度と拙者の宅へ參る事は相成らんぞ』

村 『えッ』

文 『危ない命を助けて、友之助と夫婦に致したが、泥水稼業の女故、末を案じて試して見れば、思ふに違はぬ今の有様、顔を見るさへ

五九

汚らわしい、早く爰をば立つて往け』

村『そ、それは餘り』

文『え、ッ、往けと云ふに』と文治は憤然としてお村を庭に蹴落す折しも、正面の襖を開きて、以前の鼎出來りしに、文治はハツと驚き座を正すが木頭、お村は庭に倒れて呆れてゐる、之れを賑やかなる聖天囃しの音にて道具一轉)

業平町の裏長家なる浪人藤原喜代之助の宅にて、戸外の長家井戸に、國藏の女房お浪を初め、お北お咲の三人いづれも襷掛に米を磨ぎ、或は洗濯をして居る、此模様流行唄にて道具止まる。

北『真個にお浪さんの云ふ通り、何處の世界へ往つたッて彼様酷い

内儀さんはありやしないよ』

咲『どうせ藝妓揚りだもの、あれ位の事はありうちさ』

浪『だッて彼様には酷く出來ないよ、今にお婆さんを殺して了ふかも知れやしない』と云ふ處へ下手の路次口より、番場の森松古簾を提げて出來り)

森『また三人で初めてゐるな』

北『おや森松さん』

咲『何を初めてるか、知つてお在か』

森『知つてお在か、癩に觸ら、前頭の亭主が甘いこの方の内儀さんが惚いのと云ふ、近所隣りの誹り話だ』

浪『幾ら妾達がお饒舌だッて、無暗に縁も由縁もない宅の棚下しを

するものかね』

森 『じゃ何處の棚下しをして居たのだ』

咲 『だから知つてお在かと云つたのさ、爰よ、喜代之助さんのさ』

森 『喜代之助さんが何うかしたのか』

北 『此人もボンヤリしてるよ、内儀さんの酷いのを知らないの』

森 『内儀さんは知つてるよ、あれはお前柳橋でお淺と云つた藝妓さ、

喜代之助さんだつて、今こそ浪人して彼様にして居なさるが、二

月前までは御老中の松平様の御家臣で、随分幅の利けたもんだ、

开奴をあの内儀さんに熱くなつて、到頭落籍したりなすつたもの

だから、長のお暇が出て今の體裁さ、之れだけの事は能く知つて

居るが内儀さんの酷いといふのは、何う云ふ譯だ、聞かしなさん』

浪 『その譯は恁うさ、喜代之助さんが不在になると待つて居たと云ふやうに、あの人の善いお婆さんを虐めるのよ』

咲 『口で云ふだけなら優しいが、現在の姑を打つたり蹴つたり其上に、此頃じゃ三度の御飯を一度しさや喫べさせないんだとさ、幾ら鬼のやうな人間でも、之れだけ酷くは出来ないよ』

森 『そりや真個か』

北 『なんてお前さんに嘘を云ふものかね』

森 『真個なら太え亞魔だ、旦那に爾う云つて今に泣ッ面をさせて遣ら』と云つて森松は古簾に二三杯の井水を流しかけ、急いで以前の路次口に這入る、お浪お北お咲の三人も米を磨ぎ了ひ洗濯を終りて、何か捨臺詞を云ひながら之れも續いて路次口へ這入る同時

六四
に花道より序幕の太伴蟠作、酒屋の丁稚長吉を先に立て出来りしが、長吉は喜代之助の宅を指さして)

長「爰が藤原喜代之助さんと云ひますよ」

蟠「うむ御苦勞だつた、能く教へてくれて辱ない」

長「貴郎のお出なすつた事を云つて上げませうか」

蟠「爾うしてくれれば、猶ほ結構だ」

長「承知しました」と長吉は入口の簀戸を引開け)

長「内儀さん、内儀さん」と大聲に呼ぶ、これにて奥より序幕の藝妓も浅、世話女房の姿にて出来り)

浅「なんだ、酒屋の小僧か、吃驚するじやないか」

長「お客様がお出なすつたから、知らせて上げたのだ」

浅「あや爾う、御苦勞さまねえ」と浅は蟠作と顔見合せ)

浅「あら、割下水の旦那じやありませんか」

蟠「お浅か、いや小僧、氣の毒だつた」

長「何う致しまして」と長吉は下手へ這入る)

浅「例日ながら御機嫌で結構でいます、然し能く知れましたね」

蟠「唯今の小僧に教はつたのだが、御主人は」

浅「朝から不在でございますから、情願か、お這入り下さいまし」

蟠「うむ」と首肯して蟠作は屋内に入る)

浅「丁度お別れ申してから、二月になりますね」

蟠「早いものだ、爰の主人に落籍されて、引祝ひを配つたのは昨日のやうに思つて居たが、早や二月にもなるかね」

淺 『引祝ひを配つた時は、夢にも這麼にならうと思ひませんでした
が、妻を落籍した事の御主人に知れて良人は間もなく長のお暇、
御覽の通り、見る影もない身の上になりましたが、之れを思ふと、
村ちやんの方が死て了つて宜い事をしましたよ』

蟬 『實は、其お村の事について來たのだが、死だと思ふは過誤で、
友之助と立派に暮してゐるのだ』

淺 『えッ、村ちやんが生きて居ますとえ』

蟬 『お前がそれを知らないと言ふは、近頃何うかしてゐるやうだね、
友之助と向島から情死をしたも、此家の表に住ゐなす業平文治と
云ふ者に助けられて、お崎の方の話をつけ、今では二人で淺草の
馬道に小間物店を出してゐるが、お淺、何うかなるまいか、それ

でお前の智慧を借りに來たのだ』

淺 『村ちやんが無事に爾うして居るとは、今の今まで知らなかつた、
然し、何うかなるまいかと仰やるのは』

蟬 『死て了へば兎も角なれど、無事に暮して居ると聞く時は切つて
も切れぬ心の煩惱、切ない思ひを察してくれよ』

淺 『それでは友之助との中を割いて、村ちやんをお手許に置きたい
と仰しやるのでございますね』

蟬 『出来るものなら爾うして貰ひたい、其替りお禮は望み次第だ』

淺 『有難うございます、じゃ善は急げと云ひますから、直ぐに村ち
やんの宅へ往つて、密と小當りに當つて見ませう』
蟬 『爾うして貰へば重疊だ、其處まで一緒に參ると致さう』

淺『さア旦那、情願じやうがんかも知しり出いて下さいまし』と之これにて蟠ばん作さくは戸外おとへ出いる、續ついてお淺あさも出いんとせしが、此この時とき上か手み屋や臺たいの障しやう子じを開ひらき、喜き代よ之の叻ふの母は親おや政まさ江え病びやう氣きの体ていに出い來きり、お淺あさの裾すそとグツと捉とらへて)

政『お淺、何處どこへ行ゆく』

淺『何處どこへ往ゆかうと大おほきにお世せ話わだ、其處そこを放はなして下くださいよ、人ひとの出で先さきに縁えん起ぎの悪わるい、真ま個ごとに蒼そう蠅ようい死し損そんひだ』とお淺あさは政まさ江えを突つ退たいけて、足あし早はやに戸外おとへ立た出いて)

淺『お待まち遠とほさま、参まゐりませう』と浮ういた端はう唄うたにて兩りやう人にん花はな道みちへ這はい入いる、下しも手ての路ろ次じ口ぐちより真ま假か名なの國くに藏ざう、握にぎ飯ひめしを小こ皿ざらに盛もりて出い來きり直すぐ屋うち内にいに入いり)

國『御ご隱いん居そさま』

政『お、國くに藏ざう殿どのか』

國『御ご病びやう氣きは何なにうでございませうな、氣きにも掛かつて居ゐますが齒は入い屋やと云いふ出で商しやう賣ばいのいそがしさに、尋たづねる事ことも致いたしませんでした』

政『有あ難がたうございませう、何なにを云いふにも此この年としでございませうから、兎とても本ほん復ふくは難むづかしいと諦あきらめて居ゐります』

國『爾さう氣きを落おしたものでありません、何なんしろ、御ご新しん造ぞうがああの通とほりの邪じや慳けんだから、一ひとつはお氣き病びやうもございませう』

政『病びやう氣きで死しぬは致いた方かたございませうが、妾わたしは三さん度どの食しょく事じを一ひと度どに滅へされて、あのお淺あさに觸ふ殺ころされるのでございませう』

國『何なんうして貴あなた女なを那そ麼なに酷ひどくなさるか、私わたしには御ご新しん造ぞうのお心こゝろが別わか

りません、随分世の中には姑虐めの女房もございますが、此宅の御新造のやうな女は、見たことがございませんよ』

政『あれでも悴の喜代之助が緊乎いたして居りますれば、之れほどの情ない目に逢はせませうまいが、何と云つてもお淺の云ふなり次第になつて、居るものですから、妾の云ふ事は理が非になつて、少しも聞いてくれないばかりでなく、此頃ではお淺と一緒に妾を責折檻致します、思出すと口惜しくて堪りませんから、寧ろその事に身でも投げやうかと思ひますが、長の病氣で足腰利かず、それに非業の最期を遂げては、悴の顔にも拘はる事と辛抱して、生甲斐もない命を存らへる其辛さ、情願もお察しなされて下さい』

國『貴女のお辛からうと云ふ事は、私ばかりでなく長屋中の者がお察し申して居ります、然し旦那も今にお目が覺めて、あの御新造を何うかなさいませうから、時の來るのをお待ちなさいませ、爾うして御隠居さん、失禮でございますが、唯今御飯を焚いて握飯を拵へて参りましたから、御新造の歸らないうちに早くお喫りなさいませ』

政『例日ながら國藏殿の御親切、有難うございます』と云つて國藏の差出したる彼の小皿を、手に取つて丁寧に押戴く』

國『え、ッ何をなさいませ、世が世であれば三百石取の御隠居様、我々風情の口を利く事も出来ない御身分で、僅な握飯を嬉しさうにお戴きなされる傷はしさ、お喫りなされる貴女より見てゐる私が胸一杯でございます』と云つて涙を拭ふ折しも、花道より以前の

浅出來りて屋内に入り)

浅「ちや國藏さん、お出なさら」

國「御新造でございますか、お歸りなさいませ」

浅「阿母さん、またお飯の盗み食をしてお在なざる、仕損ひをされると妾が困りますよ」

國「盗み食をなさるんじやありません、私が持つて參つたのです」

浅「仕損ひをされると困るから、態と御飯を上げないで居るに何故餘計な握飯なんぞ持つて來るんだ、妾共は浪人しても武士の端だよ、それに齒入屋の分際で握飯を持つて來るとは失禮だ、餘り人をお見下げでないよ」

國「これは失禮しました、然し憚うやつて同一長屋に住まつて居れ

ば、節句錢だつて何だつて同じにして居るじやねえか、お前さんの所が幾ら浪人様でも、引移して來た時に蕎麥を七つと配りやしめえ、矢張り二つしか配らなかつたじやねえか、御隠居さんは仕損ひも何もなさりやしねえのに、旦那が知らねえと思つて、種々の事を云つて御隠居さんを虐めやがる、お前さんは眞個に顔に似合はねえ畜生だナ」

浅「畜生でも人間でも大きにお世話だ、さつさと持つてお歸り」と云ひながら握飯を把つて投つける、此時下手の路次口より業平文治、番場の森松を連れて出來り、戸口に立つて屋内の様子を窺ひゐる)

國「勿躰ねえ事をするな、持つて來たが何てえ」と云ひつゝ、國藏は、

飯粉を拾つて口に入れる)

淺「阿母さんも阿母さんだ、齒入屋風情に握飯を貰つて喫りたうございますか、其れほど食ひたさや皿ごと喫れ」と云ふより早く彼の小皿を把つて政江に投つける、政江は其小皿に額を破られて血を流す)

政「おのれ、現在の姑に」と政江は悔しげにお淺の足へしがみつ、お淺は其足を跳返して政江を蹴倒し頬の邊りを殴らんとす、途端に業平文治、番場の森松を戸口に立たせて入來り、突如お淺の利腕を逆に捻上げ)

文「御老母、拙者は業平文治でございます、御免下さい」と云つてお淺を挫と投つけ、再び起んとする處を手早く森松に縛らせる)

森「太え亞魔だ、ざまア見やがれ」

文「いや御老母、お年を召して御病氣の上を斯る毒婦の手に責苛なまれて、嗚ぞ御残念にございましたらう、今にも喜代之助殿がお歸りになれば、拙者から委細をお話し申して、佶と和女に御安心を致させませう」

國「何しろ旦那、這麼鬼みたいな奴は世間に澤山ございませんよ、御隠居に投打をするばかりでなく、足で横腹を蹴飛ばすんでございます、眞個に呆れ返つて了りました」

文「投打と云へば御老母の額の傷だ、森松、手當をしてお上げなさい」

森「へえ承知致しました、オツ國藏さん、お前氣の毒だが此亞魔を

柱へ打縛つてくんねえ』と之れにて國藏は浅を上手の柱へ縛りつける、森松は自己が手拭を政江の頭に捲つける、爰へ花道より浪人藤原喜代之助出來りて、直ちに屋内に入りしが、思ひがけなきも浅の姿に吃驚仰天して)

喜 『浅、如何いたした』

文 『喜代之助殿、近頃出過ぎた事なれど、貴郎のおためを思つて此文治が御家内の折檻を致します』

喜 『お黙んなさい、如何なる事があらうとも家内の折檻は拙者が致す、他人の手は借り申さん、浪人こそすれ此喜代之助も武士の一人だ、妻を手込にされて其まゝには置させぬぞ』

文 『御立腹は覺悟の上だが、拙者の云ふ事を聞いた後にて刀の鞘を

お拂ひなさい』

喜 『なんと云はれる』

文 『外出勝の貴郎にはお不在中の事を御存であるまいが、御家内の邪慳非道は此長家中にて知らぬ者なく、御病氣の御老母を些かの事に難癖つけて、日毎に打擲なさるばかりか、三度の食事を一度に減じて其れさへ充分に上げられない處から、長家の者がいづれも御老母をお傷はしく思つて、お浅殿の不在を窺ひ折々食物を密と進せて居つた處、今も之れなる國藏が、握飯を拵へてお上げ申して居りましたが、其處へ御家内がお歸りになつて、國藏に悪口の結果は握飯を入れた其皿を、勿體なくも御老母の額際に投つけて、アレ、あの通りの傷を負はした上、なほ飽足らぬか足蹴にかけて

打擲せんと致された夫故に、御覽の如く縛りあげましたが、若しあのまゝ打捨置いて御老母が御氣絶でもなされた時には、世間へ何と分疏なさる、亦御家内の爲すまゝに任して置いて、萬一御老母の饑死でもなさるやうな事があれば、子としての不孝此上なきのみか、舊御主人へ聞えても宜しくございますまい、就れに致しても貴郎のお爲めを存じ、且つは御老母の御心中をお察し申し、固より御立腹を承知の上にて斯く手込に致しました、さア、斬るなと突くなと御存分になさるゝ』

國『私も今こそ旦那のお世話で堅氣になつて、憊うして働いてゐますが、其以前には悪黨仲間あくたうなかまに附合つきあつて随分邪慳ずぶんじやけんな女をんなも見ましたが、此宅こちちの御新造ごしんぞうのやうな人鬼ひとおには見た事がねえ、私が握飯むすびをお上げ申

した時にや、三百石取の御隠居ごいんきよ様が戴いたいてお喫あがりなさいましたぜ』

森『畢竟つひお前まへさんが甘あめへから這麼事こんなになつたのだ、嫌かの云いふ事ことばかりを聞いて居ゐねえて、些ちつとはお袋ふくろさんの云いふ事ことをもお聞きなすつたら、甚どん麼な酷ひどい待遇あつかひをして居ゐるか判わかるんだ、其女そのをんなはお前まへさんの嫌かじゃねえ親おやの敵かたきだ、親おやの敵かたきを庇かばつて旦那たんなを其儘そのまゝに置おかねえが可笑をかしいや、其處そこまで甘あまみや世話せわはねえ』

文『お歸かへりなされると早さう々くにお淺殿あさどのの姿すがたばかり眼めについて、御老母ごらうぼの額ひたひの傷きずが貴郎あなたの眼めには入りませんか』

喜『えッ』

文『左様さやうなお心得こころえでは、貴郎あなたにも孝行かうこうと云いふ御念慮ごねんりよがないと見えまするな』

喜 『文治殿、面目次第もございませぬ、御免ください』(と喜代之助は刀を手に立上り、敦圀暴くお淺の身邊に駈寄りんとす、文治は脊後より引止めて)

文 『喜代之助殿、血相かへて何處へ行かれる』

喜 『前の卑しい身分を忘れて母を苦しめ、我顔に泥を塗つたる憎き女奴、この場に於て手討に致します』

文 『高が女の事なればお手討にも及びますまい、先づお待ちなさい』

喜 『でも、母への申譯が立ちませぬ』

文 『それは別に所存がござる、お待ちなさい、暫らくお待ちなさい』(と無理に喜代之助を元の座へ直らせて)

文 『失禮ながらお淺殿は以前か柳橋の藝妓とやら、泥水稼業の賣入

づれを御家内にお直しなされたが貴郎の過失なれば、其身を悔いてお淺殿は此まゝ何處へなりと逐出してお了ひなさい、若しお手討になさるゝ時は、此事世間に廣く知渡りて人の嘲笑を招く道理』

喜 『何から何までのお心遣ひ、有難うぞんじます』

政 『喜代之助、萬事文治殿のお指圖に従ひなさい』

文 『それでは拙者が斯様にいたして』(と文治は立上つて刀を引抜き、お淺の髪を根元より斬落し)

文 『森松、その女を路次口から追拂つて了へ』

森 『承知いたしやした、畜生來やがれ』(と森松はお淺の繩を解く)

淺 『喜代之助さん、お前さんに柳橋の藝妓は食過ぎるよ』

喜 『なにッ』

淺 『いや、皆さん何うも御厄介さま』

森 『早く出ろ』

國 『私も次手に露路口まで送つて遣らう』と之れにてお淺を先に森松國藏の三人、いづれも戸外に立出て花道へ這入る、此間に喜代之助は政江を上手の屋敷へ抱入れる。

喜 『いや文治殿、實に面目次第もございませぬ』

文 『過まつて改むるに何の恥入る事がござらう、能くお目を覺ました、之れにて御老母も御安心でございませう』

喜 『拙者の身の上をお氣遣ひ下さつて、思切つたる御折檻を下さいましたればこそ、漸やう二月餘りにても淺の非道を承知致しましたなれど、若し貴郎がお心注げ下さらなかつた節は、遂に一人の

母を弑殺しに致しましたかも知れませぬ、此御恩は、喜代之助死すとも忘却致しません、忝けなうございます』と云つて兩手を下ぐる處へ、花道より御老中松平右京亮の物頭役中原岡右衛門、行儀霰の麻上下にて若徒と仲間を連れながら出來り。

岡 『頼まう』

喜 『文治殿、御免ください』と云つて喜代之助は戸口に立出しが、岡右衛門と顔見合せて互ひに吃驚。

喜 『やッ中原氏でござるか』

岡 『藏原氏』

喜 『一別以來御健勝で何より重疊、さア、先づお通り下さう』
岡 『然らば御免ください』と岡右衛門は若徒と仲間を戸外に待たせ

て屋内に入り)

岡「まことに暫らくてござつた、此宅へお引移しの事は、下屋敷に於て聞いて居りましたが、お訪ね申すも何とやら上へ憚りがございますから、今日までお訪ね致しませんが、時々貴殿の事を思出しては、お懐かしく思つて居りました」

喜「貴殿にも逢ひ申すも實にも恥かしうござるが、一時の心得違ひより致して長のお暇となり、斯く浪々いたし居るにも拘はらず、能くお訪ね下された、文治殿、これは拙者の朋輩にて中原岡右衛門殿と申します」

文「左様でございますか、拙者は此路次表に住居いたす業平文治と申すもの、情願か、以後御別懇にも願ひ申す」

業 平 文 治

岡「當時江戸の大俠客と、市中にて噂の高い業平文治殿とは、貴殿でござつたか、這方よりも御別懇にも願ひ申す、處て藤原氏、今日拙者の伺ひましたは餘の儀でなく、貴殿の吉事をお知らせに参りました」

喜「なに、拙者の吉事とは」

岡「格別の思召を以て、此度貴殿を、新地二百五十石にお召返しになりましたぞ」

喜「えッ」

岡「仰附られ書の一通り、お聞きなさい」と岡右衛門は懷中より、仰附られ書を取り出し

岡「其方儀、先達て長のお暇差遣はし候ところ、先祖の勳功を思召

二 幕 目

され、格別を以て此度新地二百五十石に召返され、馬廻り役仰せつけられ候旨仰せ出され候事、斯くの通りにございます』

喜『はッ、有難く存じます』

文『思ひがけなく御歸參が叶うて、嘸ど御恐悦でございませう』

喜『これが喜ばずに居られませうや、お察し下さり』

岡『そのお喜びに附込で藤原氏、久振の一曲強て御所望致す』

文『これは拙者も共に御所望いたします』

喜 然らば御免ください』(と喜代之助は立上つて、鉢の木を誂ひながら能を舞出す、之れを早笛にて木なしに幕)

(三幕目)

割下水の道場に遊子の憤怒
俠客の奥座敷に無心の婚禮
擊劍師の裏庭に意恨の血雨
俠客の奥書院に老母の死去

登場人名

俠客業平文治、 同母親鼎、 劍客大伴蟠龍軒、 實弟大伴蟠作、
門弟阿部忠五郎、 同和田原八十兵衛、 醫者秋田穂庵
左官亥太郎、 番場の森松、 小間物屋友之助、 同女房お村、
眞假名の國藏、 同女房お浪、 尼お淺、 式部屋婆々お崎、
門弟多勢、

善美を盡くしたる大伴蟠龍軒の座敷にて、實弟蟠作傲然とし
て、前幕の友之助と碁を圍み居る、其周圍には阿部忠五郎な
らびに和田原八十兵衛、醫者秋田穗庵の三人、眸を凝らして
开を見物なし居る、此模様稽古歌にて幕開く。

蟠 「何うだ友之助、この石で勝になるぞ」

友 「えッ、鳥渡お待ちなすッて下さい」

蟠 「可けない、打下してから待つ事は出来ない」

友 「でも此二目だけ」

忠 「假令町人でも、それは餘り卑怯すぎる」

穗 「勝は何うしても若先生にありますね」

蟠 「兎に角ならべて見なければ、友之助の腑に落ちまい」と之れに

て兩人碁石を並べる

蟠 「そら、三目の勝だ、唯今の五十兩は拙者の方へ貰つて置くぞ」

友 「文治の旦那から、お借り申した仕入れの金でございませうが、致

方はございませう

忠 「勝負は時の運とやら申から、左様に愚痴をこぼすものでない」

蟠 「最う一石打ては何うだ、今度は倍にして百兩に致さう」

友 「えッ、百兩」

蟠 「左様さ、汝が勝てば今の五十兩を取戻した上、なほ五十兩を儲

ける譯だ」

穗 「男は度胸が肝腎だ、思切つてお打ちなさい」

忠 「若先生とは互角のやうだから、勝たないものとも限らない」

蟠 『打つか但しは打たないか、打たなければ、穗庵老、氣の毒だが
碁盤を取片付けて貰はう』

友 『鳥渡お待ちください』

蟠 『なんだ、大層未練氣があるの』

友 『思切つて打ちませう、お敵手を願ひます』

蟠 『うむ、度胸を出したね、勝逃は卑怯だ敵手を致さう、然し友之

助、汝を疑がう譯でないが其百兩と云ふ金を爰へ出して置いて

貰ひたい』

友 『えッ』

蟠 『その金を今そこに所持致さぬば、卑怯のやうでも此まゝ五十兩
を勝逃と致さう』

友 『仰やる通り、唯今こゝには持つて居りませんが、直ぐに跡から
心算を致して持つて参りますから、情願か、今一石も願ひ申しま
す』

蟠 『それは折角だが、御免を願ふ事に致す』

友 『さゝ爾うでもございませうが、必ず持つて参りますから』

蟠 『汝が持つて来てから打つと致さう』

友 『じゃ、幾らも頼み申ししても』

蟠 『氣の毒だの』と蟠作は立上る、途端に下手の襖を開きて彼のお

村出(来り)

村 『妙な御縁から何日も良人が上りましては、圖んだお邪魔を致し
ます、鳥渡貴郎、大層歸りが遅いぢやありませんか、何をして在

らッしやるかと思つて迎ひに來ましたが、また碁のお敵手でございますか』と友之助の顔を差覗く、蟠作はお村の姿を熟と見て何をか心に打首肯さ、再び元の座に直りて)

蟠 『友之助、それでは慙うしては何うだ、拙者が百兩を貸して遣はすから、其金で打つ事にすれば宜からう』

友 『有難うございます、爾うして願へば此上ございません』

蟠 『如何にも氣の毒な様子だから、爾うして遣はす、然し金を貸すに抵當のないも可笑しいものだが』

友 『抵當と申して、別段こゝには』

忠 『若先生、斯様に致しては如何でございます、幸ひ友之助の家内か参りましたから、金を返濟致すまでアレなる家内を當家へ預か

つて置く事に致せば、餘程風變りの抵當で面白いかと心得ます』

蟠 『まさか預かつて置く譯にも参るまいが、證文の名目だけで宜いから、友之助、寧ろのこと外に抵當がなければ爾うしては何うだ、勝つても負けても無理に預からうとは申さない、勝手に連れて歸るが宜し』

友 『成程、これも洒落氣があつて面白うございませう、それでは左様に致して御拜借を願ひます』

村 『貴郎、妾を抵當にして、百兩と云ふ金を何うなさるのでございませう、妾は抵當なんぞになるのは嫌でございますよ』

友 『那麼事を云はないで、之れから一番勝負を打つて了ふまで辛抱してくれ、今度は負ける氣遣ひもなし、假令負けた處が、證文の

名目だけで預からないと仰やるから、連れて歸るよ』

九四

蟠『さア打ちなさい、證文は唯今阿部に書かせる』

忠『若先生 認めませうか』

蟠『うむ』と之れにて蟠作は再び友之助と碁を圍む、忠五郎は硯箱と紙を取出して證文を認む』

忠『これで宜しうございますか』と證文を蟠作に渡す、蟠作は口のうちに黙讀して』

蟠『讀むだ上で異存がなければ、判を捺しなさい、其判も持つて居なければ拇印で宜しい』と云ひながら更に友之助へ渡す、友之助も亦黙讀せしが、拇印を捺して忠五郎に返す、忠五郎は證文面の金百兩と書きし金と百との間へ、手早く三の字を書加へて蟠作

の傍に差置く、爰へ下手より前幕のお淺、斬髮の尼姿となりて出

來る) 淺『おや村ちゃん、何時こゝへお出だね』

村『良人の歸りが餘り遅いものだから、迎ひに來たのだが、旦那を敵手に五十兩の百兩のと云ふ賭碁をして居るのさ、人の心も知らないで、呆れ返るじやないか』

淺『だッて好いた男のする事だもの、黙つて居ておやりよ、何しろ妾がお前さんなり友之助さんを説勸めて、爰へ出這入をするやうにしたのだから、愚痴をこぼされると妾が辛くツて耐らないよ』

村『お前さんが、妾達に前の事を思はないで出入をしるとお云ひだつたものだから、商賣を廣くするには、それも爾うだと思つて、

お前さんに連れられて此宅へ出這入をするやうになりましたが、種々の物を買つて戴くは有難いなれど、近頃じや商賣を棚に上げて此宅へ伺つちや一日がりの碁遊びさ、眞個に嫌になつて了ふよ』

淺『畢竟妾が悪いのだから勘忍しておくれな、然し何とお云ひだつても、爾うして二人でお在のうちは面白いが、妾のやうな彼様羽目になつて、髪を切られたうへ宅を逐出され、心にもない尼法師なんざ、我ながら餘り意氣地がなさ過ぎて愛想が盡さるよ』(と云つてお淺は思はず悄然とする、此時蟠作と友之助は圍碁を了る)

蟠『友之助、氣の毒だが今度も拙者の勝だ』

友『致方がございません』

穗『那麼に元氣を落さずに、今度は二百兩の賭をしては何うです』

蟠『汝にさへ金の出来る心算があるなら、決して逃げは致さんぞ』

友『いえ、何う致しましても今日は勝てませんから、此勝負は翌日またお願い申す事として、之れでお暇致します』

蟠『歸るのは宜いが、家内は遣して往くであらうな』

友『えッ、何と仰しやります』

蟠『先刻に書いた證文面の文言通り、貸した金を受取るまで、汝の家内を預かつて置くぞ』

友『旦那、そりや約束が違ひます、證文には書いて置くが預りはしないと仰しやるから、それで拇印を捺したのでございますが、眞個にお預かりなさる御量見なら、彼様證文に拇印なんぞ捺しやしないんでございます、門弟衆も澤山にある立派な御身分で、弱い

町人風情を瞞着すやうな事をなさらないで、情願か、此まゝ家内と一緒にお歸しを願ひます』

蟠『黙れ、武士たるものに向つて瞞着すとは何だ、證文に家内を抵當に差入れると書いてあるから、則ち家内を拙者の手許に預かつて置くと云ふのだ、貸した金さへ持つて參れば、何時たりとも返して遣はず』

友『それじゃ、何うしても百兩と云ふ金を持つて來なければ、お村を預かつて置くと仰しやるか』

蟠『こりや友之助、拙者の貸して遣はしたは百兩でない、三百兩だ金高を間違へないやうにしろ』

友『なに、三百兩と仰しやるか』

蟠『左様さ、汝の差入れた證文にも、そら此通り、金三百兩但し通用金也と立派に書いてあるでないか、如何に女房を抵當に取られたからと申して、借りた金の高を間違へられては、用立てた拙者が迷惑いたす』

友『だつて、借りたは確に百兩だ』

蟠『汝は百兩の心算でも、證文に三百兩と書いてあるが動きの取れない證據でないか』

友『幾ら證文に三百兩と書いてあつても、私の借りたは何處までも百兩だ、これは金と百との其間へ、三と云ふ字を書入れて、二

百兩と云ふ大金を騙り取らうとなさるのだ、今の今まで立派な劍術の先生と思つてゐたが、這麼大騙りとは知らなかつた』

蟠「やい、騙りとは何だ、爰は一方流の看牌を出す蟠龍軒の道場だぞ、迂濶な事を申すと其分には棄て置かんぞ」

友「騙りに違ひないから、騙りと云ふのだ、然も大騙りだ」

蟠「いや、阿部氏、和田原氏、こいつ可哀さうに亂心致したと相見えなす、斯様な奴に敵手となつてゐても致方がないから、奥で百

兩の勝祝ひを致さう、アレなる村をお連れ下さう」

忠「承知致した」と忠五郎は八十兵衛と共に立上りて、先刻より此場の躰に泣伏しゐるお村の兩手を左右よりグツと取り

忠「若先生の仰せだから」

八「さア、彼方へお出なさい」

村「あれ御免下さいまし、良人が甚麼證文に拇印を捺したか知りま

せんが、金の抵當になるは嫌でございます、情願か、後生でございます、いますからお許し下さいます」

忠「左様な事を申すものでない」

八「素直にこちらへ来るものだ」と兩人は無理にお村を引立てる

村「あれ助けて下さい、妻や死でも爰に居るのは嫌でございます」

友「うむ、道理だ、堪忍してくれ」と友之助は立上つて、忠五郎と

八十兵衛を突退けんす

忠「え、ッ、無禮な事を致すな」と忠五郎はお村を蟠作の身邊に突

遣り、友之助を控と投つけて

忠「身軀を藻掻くと命がないぞ」と八十兵衛もろとも元の座に直る

爰へ下手の襖を開きて、序幕の婆々お崎出來り

崎 『あや、友之助さんじゃないか』

友 『式部屋の阿母か』

崎 『阿母かもねえもんだ、眞個にお前まへは酷ひどい人ひとだな、只ただ一人ひとりの娘むすめを連つ出して、向むか島しまから情死しんじつの揚句あげく、業平文治なりひらぶんぢと云いふ奴やつを掛合かけあひに寄よ來こして、毎月五兩まいづきごりやうづゝの小使金こづかひがねを贈おくると云いふので、お村むらと夫婦めうとになるを承知しやうちして遣やつたのだが、五兩ごりやうは愚おろか其月そのつきから、五文もんの錢ぜにも送おくつて來きやしねえ、妻わたしは此宅こちちの旦那だんなが種々いろくと御親切ごしんせつに仰おつしやつて下くだすつて、時々ときどきお金かねを頂戴ちやうたいするから不自由ふじゆうなしに暮くらして居ゐるが、旦那だんなのなかつた日ひにや、妻わたしやお前まへのために餓殺はしころされる處ところだつたよ』

友 『那麼事そんなことは爰こゝで云いはなくつても宜いいじゃないか』

崎 『逢あつた此場このばで云いはなくつて、何處どこで云いふのだ』

友 『私わたしの家いへと云いふものがある、自宅うちへ來きて云いひなさい』

崎 『最もう今日けふからは、云いふ事ことも何なにもないから安心あんしんおしな、其代そのかはり娘むすめのお村むらは此宅こちちの旦那だんなの御新造ごしんぞうだ』

友 『そりや亦何またどう云いふ譯わけで』

崎 『友之助とものおすけさん、無感むかん覺かくを切きつちや可いけないよ、旦那だんなから賭碁かひごの金かねを借かりる抵當ていたうに、お村むらを預あづけて置おくと證文しやうもんの中なかへ書込かきこむだじやねえか、金かねが出來できりや重疊ちやうたうだが、金かねが出來できなさいやそれまでさ』

友 『じゃ先刻さつきからの様子やうすを見て居みたのか』

崎 『下手へたな芝居しばゐよりは餘程よつほど面白おもしろかつたよ』

友 『見て居みたなら知しつて居ゐるだらう、あの大駟おほがたりにだまされてお村むらを抵當ていたうにするとは云いつたが、女房にようばうに遣いるとは云いはない心算こころざしだ』

崎 『假令お前は云はないでも、お村の方から旦那に惚れて御新造に
なりや爲方がなからう』

友 『那麼事があるものか』

崎 『だッて娘は、お前の意氣地なしに愛想を盡かして、遠くから旦那に惚れて居るのさ』

友 『えッ』

崎 『おいお村、お前にや此友之助が、未だ充分に未練を残して居るから、思切の出来るやうに今度の事を云つてお遣りよ』

淺 『阿母さんの云ふ通りさ、その方が蒼蠅くなくツて宜いかも知れない、何も彼も打撒けてお遣りな』

村 『成程、爾うした方が、友さんも諦めが附け易い、ねえ友さん、

實はお前の意氣地のないが嫌になつて、其處に居なさる淺ちやんに、爰へ連れて來られた其日から、旦那に岡惚つて居たのだから金の抵當にされたを幸ひ夫婦の縁も今日限り、妾やお前さんの處へ歸らないよ』

友 『なんと云ふのだ』

村 『今までの事は水に流して、長い夢だと諦めておくんなさい』

友 『さては皆が大騙りの襟について此の友之助を計畧の罠に落したナ』(と友之助は敦圀暴く立上り、拳を固めてお村に打つてかゝらんとす、蟠作は見るより傍の碁器を取つて、發矢とばかり其顔に投つける)

蟠 『汝の女房と思つて拳を擧げると承知をしないぞ、今は此蟠作様

の奥方だ、両手を支へて今の無禮の詫をしろ』

友『なにッ』と叫んで再び蟠作に飛蒐らんとすを、忠五郎および八十兵衛の兩人、うしろより力まかせに抱止めて』

忠『門弟衆、門弟衆』と大聲に呼立る、之れにて下手より門弟多勢出來り、友之助を散々に打擲して下手へ擔ぎ往く、此時上手の襖を開きて、大伴蟠龍軒しづかに出來り』

龍『豫ての謀計通りに、スツクリ往つて定めし蟠作も充分であらうナ』

蟠『之れも偏に兄上の御配慮、有難うございます』

龍『いや、拙者よりは其處に居るも淺の働さだ、ズツシリと汝から褒美を遣はさなければなるまい』

淺『何う致しまして、喜代之助の宅を逐出されてからと云ふものは、明暮れ此宅の御厄介になつて居るのでございますから、左様な御心配はお廢しなすつて下さいまし』

穂『淺ちゃんの働さも働さだが、爰に居られる忠五郎殿が證文面の金と百との其間へ、素早く三と云ふ字を書入れられた手際には、此穂庵も驚きましたよ』

龍『忠五郎の働さ振も見て居つたが、成程これも褒美物だ』

崎『その褒美よりも首尾よく往つたお祝ひに、寧そのこと御酒宴になされては如何でございます』

龍『酒宴とは能く氣がついた、それでは早速其仕度をして貰ひたい』
崎『承知致しましてございます』と立上らんとする折しも、下手の

襖を開きて一人の門弟あはたゞしく出来り)

門「先生、唯今も玄關へ、業平文治と申す者が、大先生にお目にか
りたいと云つて参りました」

龍「なに、業平文治が参つたか」

蟬「察するところ、友之助の話に参つたのでございませう」

龍「爲方がない、これへ通すが宜い」

門「はい」と門弟は下手へ這入る)

忠「業平文治とは業平町に住居いたす浪人の果で、當時市中に持囃
さるゝ心しふとさ侠客にございませすれば、先生御油断なすツては
可けません」

崎「全くでございますよ、見た處は蟲も殺さない顔を致して居りま

すが恐しい奴でございます」

淺「妾の這麼になりましたも、彼奴のためでございます」

村「文治と云名前を聞いてさへ妾や何だか身軀が震う様でございます
す」

龍「那麼に文治とやらが恐しければ、次の間へ立つが宜い」

村「それではあ次へ参つて居る事に致します」

淺「妾も一緒に行きませう」

崎「呆れ返つた臆病者だ、じゃ妾が案内をして上げやう」と之れに
ても村も淺も崎の三人、上手の襖を開きて這入る、途端に下手の
襖を開きて、俠客業平文治しづしづと出来り、丁寧に一禮してズ
ラリと席上を見渡す)

龍 『其處では御挨拶が出来ない、これへも進み下さり』

文 『初めてお目に懸りますが、拙者は業平町に住居致す業平文治と申す者、情願かも見知り置かれて幾久しく御別懇に願ひます』

龍 『御丁寧の御挨拶痛み入る、拙者は大伴蟠龍軒と申す無骨者でござる、以後御別懇にお願ひ申す』

蟠 『拙者は舍弟の蟠作にございます』

忠 『拙者は門弟の阿部忠五郎と申します』

八 『其次弟子の和田原八十兵衛』

碓 『人の脈取る秋田穂庵』

蟠 『一同御挨拶を申します』

文 『これは亦いづれもさまには御丁寧なるお言葉、恐入りました、さ

て唯今斯くも目通りを願ひましたは、餘の儀でもござりませんが、小間物屋の友之助が事について罷出ました』

龍 『あの者は些かの間違ひより、唯今當座敷に於て狼藉を働きたる故、門弟共に申附けて戶外へ逐出させたのでござるが』

文 『友之助が御當家へお出入になりました事は、唯今本人より初めて承まはつたのでござりますが、不思議の縁で三月ばかり以前より拙者店請と相成り、浅草の馬道に些かの小間物店を出させ居りました處、仔細あつて暫らく拙者の宅へは寄せつけないうで居りましたが、唯今所用あつて御門前を通行いたしますと、御門弟衆に

打擲いたされたとか申して、割下水の傍に倒れて居りましたから種々と介抱いたして仔細を聞きますと、何か、圍碁のお遊びよ

り百兩と云ふ金子を御拜借いたし、其抵當に家内をお預りなされ
 たとやら、亦その證文に入字をして、百兩を三百兩になされたと
 やら、夫等の事より御門弟衆の打擲に逢つたとか申して居りま
 すが、豈夫に大伴の先生の町人風情に左様な事を致されまいと存
 じ、一應仔細を承まはりました上、當人へ篤と意見を加へまする
 量見て罷出ました、友之助の申す事柄は誠の事でございませうか』
 龍『これなる舍弟の蟠作と賭碁の争ひより致して、女房を抵當に三
 百兩の金を貸したは誠の事でございませう、其證文はアレなる阿
 部忠五郎が認めましたが、入字をなしたか何うだか、其邊の事は
 存せねど貸したは確に三百兩、假令入字を致した處で金高に相違
 はない筈、それに亦證文へは立派に女房を抵當にと認めてあるか

ら、文言通り預かつたのでござるが、友之助は其三百兩をも賭碁
 に負けた腹立紛れ、借りた金を百兩だなどい申し、揚句の果には
 蟠作を捉へて騙り呼はりをするばかりか、手當り次第の狼藉を働
 かんぞ致した故、門弟共に申附けて門前へ逐出させたのでござる
 が、町人と云ひながら實に怪しからん奴にござれば、文治殿も餘
 りお世話をなさらんが宜からうと心得る』
 文『常々出入を致す先生の事を、騙りなど、悪口するは不埒至極な
 奴、大分三百兩を取られた悔しさに申したのでございませう、其
 儀は拙者よりお詫を申しますが、元々お出入を致して居つた町人
 でございませうから、其三百兩さへ持參致せばお村はお返し下さ
 いますか』

龍 『固より返さねばなるまい』

文 『それでは、一應、證文を拜見致したうござります』

龍 『蟠作、證文をお見せ申せ』

蟠 『能く御覽なさい』(と蟠作は證文を取出して文治に渡す)

文 『成程三百兩だ、此大金は兎ても友之助に調達は出来なからう、

先生、若し此金の御返濟が出来ない其時はお村を何となさいます』

蟠 『拙者の手許に止めて置いて、妻にするとも圍妾にするとも、思

ひのまゝに致すのだ』

文 『證文面の抵當はお村の身軀ばかりでござります、情を御自由に

させるとは書してござりますまい』

蟠 『えッ』

文 『假令お村の心が變つて居るにせよ、指一本でも觸はる時は云は

ずと知れた姦通同然、そんな窮屈なものをお預かりなさらないで、

情願か、友之助に返してお遣り下さい』

龍 『黙れ、物々しく名乗をあげて掛合に来るからは、定めて金を持

つて来たかと思ひの外、一兩の金さへ出さずお村を返して呉れる

とは、餘に我々を馬鹿に致した申分だ、武士を武士と思はずして

勝手な事を云ふ時は、俠客であらうが何であらうが容赦致さんぞ』

蟠 『お村が返して欲しくば三百兩の金を並べろ、其うちが鏝一文か

けても返す事が出来ないから爾う思へ』

忠 『業平とか何とか云つても、金がなければ犬の子同然だ』

穂 『改めて金を持つて来るか、左もなきや指を喰へて其まゝ引下つ

たが身の爲めだ』

八『愚圖々々いたすと、友之助同然の目に合はせるを』

文『些かの金數なれば拙者が立替へて、お村を連れて歸りませうなれど、三百兩と申す大金では、拙者に於ても調達が難かしうございませうから、先生を武士とお見かけ申してお頼み申した次第でござるが、唯今の御立腹ではお願ひ申しますまい』

龍『願つた處が駄目な事だ』

文『その代りに此證文は拙者がお預かり申します』

龍『お村を預かつて了へば反古同様だ、勝手に持つて早く歸れ』

文『先生の方では反古同様でも、拙者の方に取つては大切な證文、金と百との其間へ後から加へた三の字の、入字と歴々別つてゐる

は、友之助が百兩より借りないと云ふ生證據』

龍『なんと申す』

文『如何やうに仰しやるとも、三百兩と云ふ大金の證文書くに三の字を脱かすと云ふ筈がございますまい、それを後からお書入れなすつたは其處に仔細がございませう』

龍『では此蟠龍軒が、百を三百に直して二百兩の金を騙るものとでも申すのか』

文『騙りの何のと那麽事は申しませんが、若し此證文を奉行所へでも出す時は、甚麽事になるかも知れませうまい、其處を思つて拙者がお預かり申した上、宅へ歸つて奇麗に火中致して了ひますから、友之助の負けたと云ふ五十兩の金だけを、當人に返してお遣り下

さう、爾うでもしてお遣りなさらねば友之助の身が立行きまますま
さう
』

龍 『立行かうと立行くまいと、那麽事を拙者の存じたことか』

文 『爾うでもございませうが、高がお遊び半分の賭碁でございます
から、友之助を不憫と思つて五十兩だけ返してお遣り下さい、仕
込の金は取られ、戀女房のお村は取られ、其上散々打擲されて
何うして立つ目がございませう』

龍 『えッ、蒼蠅い奴だ、幾ら云つても無駄だから、早く歸れと申す
に』と蟠龍軒は衝と立上る、文治は慌て、其身邊に駈寄り、裾の
あたりをグイと掴むで)

文 『浪人すれど武士たるものが、之れほど言葉を下げて頼むでも、

聞容れないと云はるゝか』

龍 『知れた事だ』と蟠龍軒の裾を振拂ふに文治は思はず手を放せし
が、再び腕を延ばして今度は袖を取らんとす、其額を蟠龍軒は持
つたる煙管に發矢と打つて、冷笑しながら足早に上手へ這入る、
文治は我知らず袖をかゝげて、傍に置きし自己が刀を取上げ、其
柄に手をかけしが、二の腕に刺したる母の字の入墨を見て、ハッ
と氣を取直すが木頭、これを琴入の六段にて道具一轉)

庭前の樹木蔭鬱たる業平文治の奥座敷にて、眞假名の國藏椽
端に腰をかけ、番場の森松大胡座を組みゐる、此模様端唄に
て道具止まる。

國 『ちい森や、手前も番場の森松、俺も眞假名の國藏と異名を呼ば

れ、お互ひに悪事を重ねて、兎ても疊の上じや死なれねえと思つて居たを、旦那のち庇陰で恚うして世間並の人間になつたのは、實に有難い譯じやねえか』

森 『真個に有難いよ、俺のやうな者が、森さんとか何とか云はれるやうになつたは、皆こちらの旦那のち庇陰だ』

國 『俺ア死でも旦那の御恩は忘れねえ心算だ』

森 『然しお前、なんか用事があつて來たのか』

國 『勝手なやうだが、此頃じや切々と齒入屋を稼いでゐるから、用事がなくちや來られねえ』

森 『その用事と云ふのは何だ、介意はなきや聞かしねえ』

國 『實は御隠居さんから頼まれて、旦那の御新造を連れて來たのだ』

森 『なに御新造を連れて來たツて、开奴は初耳だ、何處に居なさるか、鳥渡挨拶がして置きてえもんだ』

國 『爰に入らツしやれば逢はせて遣るが、後から嬪が連れて來る事になつて居るんだ』

森 『开奴は残念だが、御新造は何處のお嬢さんだ』

國 『お前知つて居るだらう、三月ばかり以前に、吾妻橋の河岸で殺された小野庄左衛門様の嬢さんだ』

森 『うむお町さんか、あの嬢さんなら知つてるよ、去年の冬だツたか、阿父さんの眼病が癒してえと云つて、雪の降るのに龜戸の天神様で、お百度を踏むて寒氣に倒れて居なすツたを、自宅の旦那が通りかゝつてお助けなすツた嬢さんだ、其時分にや松倉町の裏

長家に住んで在らしつたが、評判の孝行娘だ』

國『その孝行な處を見込めて、御隠居さんが旦那の御新造にしたいと仰しやるんだ、爾うして旦那には内々だが御隠居さんの仰しやりつけて、實は十日餘り俺の宅へ預かつて居たのだ、お前の知らねえのは無理はねえ、旦那だつても知りなざるめえ』

森『全くだ、夢にも知らなかつたよ、それで今夜が婚禮と云ふ譯か』

國『爾うかも知れねえ、何しろ、急に裏口から密と連れて来いと云ふお使が来たから、連れて来る段取にしたのだ』と云ふ處へ下手より國藏の女房お浪、序幕の娘お町を連れて出來りしが、お浪は枝折戸の外より庭内を差覗きて』

浪『鳥渡、お前さん、あれさ鳥渡』

森『兄哥、誰か呼んで居るやうだぜ、今のが来たのじやねえか』

國『爾うかも知れねえ』(と國藏は枝折戸の傍に來りて)

國『お浪か、何うして這入らねえんだ』

浪『だつてさ、誰か居ると悪いと思つたから』

國『誰も居やしねえ、嬢さんも一緒だらう、早く這入んねえ』(と之れにてお浪は、お町と共に入來りて椽端に腰をかける、森松はお町を見るより遽に座を正して)

森『お嬢さん、御機嫌宜しう、昨年の冬、龜戸の天神様でお逢ひ申しやして、それから旦那と一緒に松倉町のお宅へ參つたさりで、ござりましたね、さア、情願か、御遠慮なさらないでズツと這方

へ』

浪 『森松さん、大層畏まつて居るじやないか』

森 『畏まつて居るんじやねえ、之れが俺の本來だ』

國 『笑はせやがる、筵の上に轉がつて居るのが本來だらう』(と國藏と森松とお浪の三人、無遠慮の高笑ひをなす、爰へ正面の襖を開きて文治の母親鼎出來り)

鼎 『國藏、御苦勞だツたね』

國 『ちや御隠居さんでございませうか、急にと云ふお使でございませうが、嬪が出際になつて、湯に入つたり髪を結つたりしやがるもんでございませうから、大層遅くなりまして申譯がございませう』

鼎 『それは女の身嗜みと云ふものだから、那麽に咎めるものでない

然し、今日お前の處へ使を出して、お町を連れて来て貰ひましたは、忤と心ばかりの内祝言をさせたいため、町や、お前も其心算で居なさい』

町 『御隠居様の言葉でございませうが、妾の様な不束者が、兎ても文治様のお氣に叶ふ筈は無いませうから、其思召は誠に嬉しうございませうが、情願か、御膳炊きの女中にでもお置き下さいませ』

鼎 『その心配は要らぬ事、妾が慙うしてお前を見込むだうへ、忤と添はせる心算だから、忤の氣に入らないと云ふ譯はなからうが、若し忤の氣に入らなければ、妾が娘に貰ひませう』

町 『何から何まで、お有難うございませう』
鼎 『それでは忤の歸るまで、次の一間で何かの支度をなさるが宜し』

浪「その役は差詰め女の妾が勤めてございます」

森「俺も一緒に手傳はう」と之れにて何れも鼎を跡に、正面の襖を引開けて這入る、途端に下手より業平文治悄然として出来りしが思入ありて直ぐに座敷へ上がる」

文「阿母様、唯今歸つて参りました」

鼎「大層遅くなりましたね」と云ひつゝ、鼎は文治の額際を見て」

鼎「悴、お前の額は何うしました」

文「えッ」

鼎「また喧嘩をしましたね」

文「いえ、喧嘩を致したのではございません、唯今歸らうと致しする道で竹を擔いだ者に出逢ひましたが、誤つて其竹の先に突か

れて此通りの疵を受けました、無禮な奴と思ひましたが、頻りに詫を致すものでございますから、棄て置さましてございます」

鼎「妾が見てさへ竹の疵とは思はれないが、斷つて竹の疵だと云ひなら、強いて尋ねは致しません、腕に刺して上げた母と云ふ字の入墨を忘れはしますまいね」

文「これを忘れて宜いものでございませうか、寝た間も忘れた暇はございません」

鼎「お前が亦しても喧嘩をするは、畢竟母と云ふ外に其身の重荷がないからの事と思ひますれば、お前に嫁を娶らうと思ひます」

文「阿母様の仰せとあれば嫌とは申しませんが、其嫁に参る者がござりますます」

鼎 『若し亦あれば何うなさる』

文 『唯今申しました通り、仰せに従つて縁組いたす事に致します』

鼎 『それでは云ひますが、實は過日から、三月以前に吾妻橋の河岸で非業の最期をお遂げなすつた小野庄左衛門殿の娘御を、貰ふ事に致して置きました』

文 『お町殿でございますか』

鼎 『今宵内祝言をさせる心算で、國藏夫婦を仲人役にお町も一緒に呼んで置きましたれば、思立つたが吉日とやら、此場で假の盃をなさるが宜い』

文 『はい、承知致しましてでございます』と頭を下ぐる此時、再び正面の襖を開きて、お浪を先にお町、國藏、森松の三人出來り)

浪 『おや旦那、お歸りでございますか』

森 『お支度が調ひましてございます』

鼎 『それは御苦勞でございました、早速ながら此場で假の祝言を致させませう』と之れにてお浪と森松は、亦も正面の襖を開きて銚子盃を取出し來り、國藏その中に座りて媒灼役の盃を取交さしむ

森 『いや、お目出度うございます』

國 『目出たいと云へば、媒灼人は宵の内とやら、お浪、歸る事にしやうか』

浪 『お暇致しませう』と國藏お浪の兩人は一禮して庭に下り、直ちに下手へ這入る、鼎と森松の兩人は正面の襖を開けて這入る) 文 『お町殿』

町 『はら』

文 『縁あつてお前が、爰へ嫁に来やうなどは、今の今まで思はなかつたが、然し憊うして死水を取合ふ中となつたからは、當家の家風に反く事は出来ませんぞ』

町 『固より貴郎の嫁になどは、妾でさへも思ひがけない事でございましてが、御隠居様の思召にて斯様な事になりましたは、冥加に餘つて勿體ないやうに存じます、生れついでの不束者でございませれば、足らぬ處は一々憊うしろ彼様致せと御意遊ばすやうに願ひます、亦心の限り阿母様にも御孝行を盡くしますれば、親族縁邊のない身を不憫と思召し下さいますして、行末お見捨て下さらないやうに願ひます』

文 『夫婦は其初見にありと物の本にもあれば、能く云つて聞かします、拙者より阿母様の機嫌を取つてくれなければ困ります、亦人間は老少不定とか云へば、翌日にも此身の死ぬやうな事があれば、跡に残つた阿母様の御介抱を頼みまするぞ』

町 『御意あそばす迄もなく、若し貴郎に那麼悲しい事がございますれば、妾は阿母様と二人で終りまする』

文 『また拙者は性質癩癩持ちで、詰らぬ事に人を打擲する事がある然し女や小供は未だ打擲致した事はないが、それでも我が心に逆らはれると癩癩に障りますから、決して逆らはないで置いて貰ひたい』

町 『仰しやるお言葉には背きません』

文 『忝けない、それでは申聞けるが、拙者は今晚これから直ぐに出
て往きます、成べくなら、婚禮の當夜なれば往きたくなくけれど、
往かずに居ると云ふ譯にも參らねば出て往きます、拙者が出て往
つた跡で、阿母様がお目をお覺まし遊ばして、文治はとお問ひな
すツたら能く眠りついて居りますから、御用なれば妾へ仰せ聞け
られたいと云つて、お前が引受けてくれないでは困ります』

町 『何處へも出になります、爾うして何時も歸りてございます』

文 『歸りは何れ拂曉であらう、若し拂曉でなければ四五十年、歸ら
ぬものと思つて貰ひたい』

町 『そりや亦何う云ふ理由でございます』

文 『理由と云ふは唯だ義の一字だ、言葉返しをしてはならぬと申し

たてはないか』

町 『御免あそばしませ』と云つても町は思はず泣沈む、文治は用意
をよなしたりけん、背後より鎖帷子および大刀を取出して、手早
く开を身に纏ひ、物をも云はで縦々と庭に下立つ、お町は我知ら
ず其裾を捉へて』

町 『旦那様、何う云ふ御立腹の事がありなさるか存じませんが、
お赦し下さいまし』

文 『えいッ、唯今申した事を忘れたか、言葉を返しては相成らんぞ』
(と云つても町の捉へし裾を拂ふが木頭、これを蟲の音にて道具一
轉)

以前の太伴蟠龍軒が座敷にて、實弟蟠作脇息に凭れながら眠

りゐるを、式部屋婆々お崎團扇にて煽ぎ居る、此模様鳴物な
しにて道具止まる、

崎 『本所に蚊がなくなれば大晦日と云ふが、眞個に甚い蚊だよ、若
し旦那、這麼處で蚊に責められて居ないで、お居室で樂にお寢み
なさいましナ』

蟠 『うむ、起すな、起すな』

崎 『起すなと仰しやつても、先刻からお村がお起し申してくれろと
云つて居ますよ』

蟠 『うむ、喧しい、暫らく黙つて居てくれ』

崎 『加旃に秋ぢかい所爲か、夜になると冷やりと致しますから、お
風でも召すと可けませんよ、ねえ旦那、旦那、あら到頭お寢みな

すツたよ、蒲團でもかけてお上げ申ませう』とお崎は上手へ這
入る、途端に下手の襖を開きて業平文治、白刃を提げながらヌツ
と出来りしが、幾度となく四邊を窺ふて、ヤハヤ蟠作の肩頭に一
太刀ふかく斬つけんとなす折しも、上手より以前の崎、麻蒲團
を抱えて出来る、文治は見るより倏忽その背を大袈裟に斬下ぐ、之
れにてお崎は物をも云はず、虚空を掴むて撞と倒れる、其物音に
蟠作は醉眼を開きて、文治の姿をデロリと眺めしが、衝と立上る
や否や、承塵にかけし鎗を取つて、
蟠 『曲者ツ』と云ひながら突いてかゝる、暫らくは兩人たがひに秘
術を盡くして闘ひ居りしが、蟠作は遂に鎗を叩き落されて斬殺さ
る、此時上手の襖を開きて、彼のお村出来りしが此躰を見るより

村『あれ』と云つて逃げんとす、文治は背後より帯を掴んで引戻し
 さま、鳥渡立廻りの末苦もなく其首を打落す、爰へ上手より一人
 の門弟、手燭を持ちて出来りしが、文治の姿を見るより俄にブル
 ンと震ひ出す、文治は手真似に門弟を呼近づけ、手燭を高く掲げ
 しめて、持つたる刀の刃翻れやしつらんかと、鏝下より切先まで
 を熟と撿め、更に其刀の裏を反すが木頭、今度は切先より鏝下へ
 見下す、門弟はブルンと震へる、之れを鳴物なしにて道具一轉
 矢張り以前の業平文治が奥座敷にて、番場の森松と左官亥太
 郎の兩人、煙草を喫みながら何をか話し居る、此模様端唄に
 て道具止まる、

亥『真個に森松、俺ア大御無沙汰をして丁つたよ』

森『些とも來ねえもんだから、何うしたらラツて旦那が甚く心配し
 て居たよ』
 亥『一度來てえと思つて居たのだが、何だか用事があつて出られね
 えもんだから、旦那の處ばかりじゃねえ、何處へも顔出しをしな
 がったのだ』
 森『なんか用事があるんらだうと思つてゐたよ、然し喜こんでくん
 ねえ、昨夜旦那に御新造が來たよ』
 亥『冗談じゃねえ、知らせてくれ、ば鯉節の一本も持つてよ、旦那
 ち目出度う御座いやすと云つて來たものを』
 森『真個の祝言じゃねえから、何處へもお知らせなさらねえのだ、
 表向の婚禮となりやお前の處へも知らせらア』

亥 『旦那に爾う云つてくんねえ、之れは詰らねえ物だがツて上げてくんねえ』と亥太郎は携さへし菓子くわしの折箱をりばこを差出す、同時に正面どうじの襖ふすまを開きて業平文治なりひらぶんぢ出来る

森 『旦那亥太郎が這麼物こんなものを持つて参りました』

文 『それは氣きの毒どくだ』

亥 『何う致いたしまして、然し、今森公いまもりこうに聞きや、昨夜御新造ゆふべごしんぞうさんがお出いでなすツたさうです、ね、鳥渡ちよと知らせておくんなさりや、祝物いはひものでも持つて来るんでございます、何故なせ知らせて下くださらねえ』

文 『改あらたまつて婚禮こんらいをする時には、是非共せひとも知らせる心算つゑりだから、悪く思おもつてくれるナ、爾うして阿父おとうさんはお壯健たうしやかね』

亥 『親爺おやぢでございますか、這麼事こんなことを云いツちや濟すみませんが、十日とまか以

前とにお芽出度めでたくなりましたよ』

文 『そりや知らなかつた』

森 『なぜ知らせねえんだ』

亥 『俺共わつちどものやうな半纏はんてんぎの處ところへ、旦那だんななんぞが難むづかしい扮装なりで來これりや、氣きが詰つつて困こまりますから、それでお知らせ申まうさねえんです』

文 『定さだめて愁傷しゆうじやうな事ことだらう、病氣びやうきは何なんであつたの』

十 『俺わつちの喧嘩けんくわ好きずきを心配しんぱいしたのが病氣びやうきの種たねになつて死しんだのでサ、生きて居ゐるうちに好きずきな物ものでも喰くはせて死しんだのならば可いいがと思おもつて、死しんでから氣きが附ついても爲方しかたがねえ、那麼事そんなことを思おもつて俺わつちが泣なくと友達ともたちの奴等やつらが、鬼おにの目めに涙なみだだと云いやがるんです』

文『現在の親が死では甚麼者だつて泣かずには居られまい、迫めて見送りをしなかつただけが残念であつた』

亥『其處は旦那の御婚禮と差引にしませうよ、何しろ俺は馬鹿に附合が廣いものだから、裏店の吊ひてありながら、強飯が八百人前』

森『そいつは豪氣だつたな』

亥『苦勞をさせた親の事だからと思つて、俺に出来るだけの立派な吊ひをしたのですが、組合の者が皆供に立つてくれて、富士講の先達だの木魚講だのが出ると云ふ騒ぎで、寺を借りて坊主が十二人出るやうな譯で』

文『ふむ、勿々立派だつたね』

亥『それも宜いが蠟燭だの線香だのと云つて、家の中へ一杯に積んで山のやうになりましたよ、金でも持つて来れば宜いに、喰へもしねえ蠟燭なんぞを持つて来て、其返禮に、茶の角袋でも附けなければりやならねえ、之れが小千軒もあるんです』

文『天にも地にも一人の親の事だから、出来るだけは立派になるが宜い』

亥『へえ、何だつて富士講の先達だの、法印が法螺の貝を吹くやら坊主が十二人』

森『判つてるよ』

亥『それも宜いが、喰へもしねえ蠟燭だの線香だのを貰つて、返禮をしなさいやらねえ』

文 『それが孝行の仕納めだから立派にするが宜い』

亥 『何しろ富士講の先達だの法印が法螺の貝を吹くやら坊主が十二人て』

森 『おい、同じ事ばかりを繰返して居るじやねえか、何うかしたのか』

亥 『何うもしやしねえが、實は旦那、物が入つて動きがつかまませんから、金を貸しておくんないな』

文 『道理で可笑しいと思つたよ、一つ言ばかり云つてゐるから正直だ』

亥 『今までの身上が悪いから、誰も金を貸してくるものはありませんやしませんや、這奴は旦那にお頼み申すより爲方がないと思ひまし

たが、何うも金を借りると云ふ奴は馬鹿に云出し難いものだから一つ言を云つてりや旦那がお察し下さるだらうと思つて、へへ、濟みませんが貸しておくんないな』

文 『放蕩に遣ふのでないから貸しませう、幾らあれば其義理が濟むのだ』

亥 『へえ、五十兩あれば宜しうございます』

文 『五十兩で宜いのか、貸してあげるから安心なさう』

亥 『有難うございます、其代り俺は抵當を持つて参りました、抵當と云や馬鹿に大袈裟でございますが、證文がはりと思つて之れを預かつて置いて下せえ』と亥太郎は序幕に拾ひし蟠龍軒の煙草袋を差出す』

森 『妙な物を持つて居るじやねえか』

文 『ふむ、如何にも亥太郎としては妙な物だ、胴亂仕立の煙草袋だ、高麗の青革で後藤宗乗の打つた趙雲の圓金物、這麼物がお前の處にあるべき道理はない、何うしたのだ』

亥 『なに、其妙な泥塗けになつて居たを拾つたのでございます』

文 『爾うであらう、何しろ之れは結構な物だ、何者が持つて居たか知らないが、落した者は定めて迷惑をして居るであらう』

森 『それを抵當に入れるなんざ、亥太兄哥も餘り人の善い方じやねえな』

亥 『拾つた物を無暗に我物にしやしねえが、此品ばかりは俺の物にしたつて介意はねえんだ』

森 『そりや何う云ふ理由だな』

亥 『忘れもしねえ丁度五月の十二日、俺の友達が請地に住んで居ましたから、其處へ遊びに往つて思はず知らず夜を更し、自宅へ歸らうと思つて吾妻橋の河岸を通りかゝると、五十餘りの浪人が殺されて居ました。其死骸の片脇に、此煙草袋が落ちて居ました。此煙草袋は倍と殺した奴の物に違へねえ、何かの役に立つたらうと思つて拾つて歸つたのでございます』と云ふ爰へ正面の襖を開き、出てお町出来る。

亥 『あや、旦那、この方が御新造でございますか、俺は神田の豊島町に住んで居る左官の亥太郎と云ふものでございます、旦那には何日も御厄介にばかりなつて居ますが、情願か、幾久しくも願ひ』

申します』

町 『お初にお目にかゝります、旦那様、今この方の仰しやつた事を失禮ながらお次で聞いて居りましたが、月日と云ひ場所と云ひ阿父さんに相違ございませんから、其煙草袋が敵の品でございますか』

文 『お前の云ふまでもない、拙者も爾う思つて居るのだが、此持主の目利きがつかない』

亥 『へえ、では殿されて居たあの浪人が』

森 『小野庄左衛門様と云つて、御新造の阿父さんだ』

文 『何うか致して此持主を捜した上』

町 『旦那様、敵が討ちたうございます』と云ふ處へ下手より、小間

物屋友之助よろ／＼として出来りしが、直ぐに庭内へ入りて座敷へ上り)

友 『旦那、昨日は種々と有難うございました』

文 『お、友之助か』

友 『大層顔色が悪いやうだが、何うかしなすツたか』

友 『いえ、別段に何うも致しません』と云ひつゝ、煙草袋に眼をつけ』

友 『やッ、此煙草袋が、旦那、何うして爰にあるのでござります』

文 『お前、この煙草袋を知つてゐるか』

友 『えい、知つて居りますとも、私が未だ芝口の紀伊國屋に居りまして、柳橋へ通つてゐる時分でございましたが、此煙草袋は崎の手で、割下水の蟠龍軒へ七兩に賣つた品でございます』

文 「そんなら之れが蟠龍軒の品であつたか」
 町 「妾が豫ての推量に違はず、扱てこそ敵は」
 亥 「蟠龍軒でございましたか」
 文 「嗚呼討漏したが」と文治思はず齒嚙をなすが木頭
 皆 「えッ」

文 「なに、今に敵を討ッてくれるぞ」と云つて文治は、それとなく
 蟠龍軒を討漏せしを残念がる、此模様稽古歌にて幕

(四幕目)

江戸橋の往來に囚人の赦免
 御馬廻の住宅に貞婦の命乞

登場人名

業平文治、御老中松平右京亮、同家臣藤原喜代之助、
 同中原岡右衛門、左官亥太郎、眞假名の國藏、番場の森
 松、醫者秋田穂庵、小間物屋友之助、同心佐田權左衛門
 國藏女房お浪、文治女房お町、下女お鶴、尼お淺、非
 人五人、番太二人、同心二人、近習三人、仕出大勢、
 江戸橋通りの往來にて橋際に非人一人、菰を纏ふて寝轉ひ居
 る、此模様辻打にて幕開く、

と直ぐに上手より仕出し大勢出来り、業平文治の老母鼎が病死して、葬禮を送りし由の臺詞を述べ、彼の乞食に錢を與へる、乞食は禮を述べて下手へ這入る、同時に上手より文治の女房も町、彼のお浪と共に出来り、仕出しに向ひて丁寧に腰を屈め、

町 『皆さんは、未だこれにお出でございましたか、今日は遠方の處を、御用の多いに態々とお送り下さいまして有難ふございます』
仕出し 『人間と云ふものほど判らないものはない、昨日までは彼様にお壯健で在りましたやうですが、僅一晚のうちに亡くななりさうとは』

同乙 『實に思ひがけない事ではございましたよ、眞個に彼様人の善い御

隠居はありやしない』

森 『御新造も定めて御愁傷でございましたやうが、餘りお嘆きなすつて和女が亦お煩ひなさるやうな事があつては可けませんから、お身躰の御用心をなさいまし』

町 『有難ふございます』

浪 『貴郎方の仰しやいます通り、彼様善い方はございませぬから、妾までが親に別れたやうな氣が致します』

町 『最う少し、生きておいで下さつたらと思ひますが、致方もございませぬから、妾は寧ろのこと尼にでもなつて了ひたいと思ひます』

浪 『圖んだ事を仰しやいます、和女が尼になつて、旦那は何うなさ

るんでございます』

仕出し『親孝行と評判の高い文治殿の事なれば』

同乙『御出家におなりなさるかも知れませんが、いや、私共は之れでお別れ申して』

同丙『一足お先へ参ります』

町『いや、妾も御一緒にお供を致しませう』と何れも下手へ這入る、途端に後ろの樹蔭より尼お浅出来りて、お町の跡を熟と見送り居る、爰へ上手より醫者秋田穂庵見苦しさ扮装にて出来りしが、偶とお浅の顔を見て』

穂『浅ちゃん、何をして居るんだ』

浅『あや、穂庵さんか、此頃は何うして居なさる』

穂『何うして居るも、憊うして居るも、割下水の若先生はアノ通り殺されて了つて、跡に残つた大先生は何處へ逃げて了ひなすつたか行衛が知れず、宛然と祿に放れたやうなものだから、喰ふや喰はずで困つて居るのだ』

浅『その難澁はお前さんばかりでないよ、妾も今じや其日に困り、延びかけた髪を亦切つて、心にもない念佛三味の托鉢尼さ、然し割下水の大先生は、此頃風の便りに聞きや、なんでも大きな船に乗込むで、海賊同様の善くない事をして居ると云ふよ』

穂『なに、あの大先生が』

浅『お前さんは何にも知らないと見えるね』

穂『知らないとは』

淺「あの人の古い悪事をさ、妾の聞いたには、あの大先生は其以前、西國邊の大きなお大名の御家臣であつたさうだが、太い事をたくんで夫れが發覺た處から、逐電して此江戸へ來て町道場をお開きなすつて在らしつたのさ、夫れが其國許へ知れた處から、蟠作さんの殺れた其晩に、何處かへ逃げて到頭海賊同様の身の上におなりなすつたと云ふ事だよ」

權「何うで夫れくらゐの事はあるだらうと思つて居たよ、假令海賊が泥坊でも介意はないから、憚うして難澁をして居るより、大先生の身邊へ往つて氣樂に其日を送りたいものだ」

浪「妾も爾う思つて居るのだが、探ねて探ね當らない事はなからうから、行衛を搜して見やうじやないか」

權「兎に角こゝで話もならないから、其邊まで一緒に往かうと、兩人は下手へ這入る、爰へ花道より小間物屋友之助、本繩にかけられて裸馬に跨り、引廻しの罪人となりて乞食四人、番太二人、同心二人、同心頭佐田權左衛門に護衛せられて出来る」

友「お役人様、お願がございます」

權「お願とは何だ、早く云へ」

友「まことに恐入りますが、咽喉が渴いてなりませんから、情願か水でも湯でも一杯お飲み下されたらうございます」

權「橋詰の町番屋で休むだ時に、なぜ云はんだ、蒼蠅い奴だ、最う少し辛抱しろ」

友「苦しくて耐りませんから、お慈悲に一杯お飲み下さしませ、

鈴ヶ森まで往つて仕舞へば首のない者でござります、一杯だけ願ひ申します』

權 『お上へ手数をかける奴だ、番太、其邊で貰つて遣つてくれ』

番 『へい』と一人の番太、捨臺詞を云ひて下手へ這入りしが直ぐに水を持来り、友之助に飲ませる、折しも上手より業平文治、麻上下にて番場の森松を従へ出来る)

森 『旦那、可哀さうに引廻してすぜ』

文 『甚麽悪い事をしたのか知らないが、引廻しになる時は極重悪人でも善人になつて居るものだ』

森 『旦那、その捨札を讀んで聞かして下さいな』

文 『唯今讀であげるから聞さなさい、銀座二丁目當時無宿友之助二

業平文治

四

幕

目

十三歳、やッ』

森 『旦那、友之助さんじゃありませんか』と云ふて森松は馬上の友之助を打見遣り)

森 『お、友之助さんだ』

文 『うむ、友之助か』

友 『旦那、濟まない事を致しました』

文 『濟まない事とは如何致したのだ、いや待て待て、右之者去ぬる七月十五日日本所北割下水大伴蟠龍軒方へ忍込み同人舍弟を始め外二人の者を殺害致候者也、お、ッ』と高く叫びて友之助の身邊に駈寄らんとす、此時非人は用捨なく馬を引出す)

文 『暫らく、暫らくお待ち下さい』と文治は非人を突退けて借と馬

の轡を把る)

非甲「やい、何をしやがる、御用だく」

非乙「其處を退かねえと、馬に蹴られるぞ」

文「假令馬に蹴られて命を落すとも、此罪人は遣られない、暫らくお待ち下さる」

非甲「え、いつ、強情な奴だ、御用と云ふ事が判らねえか」

非乙「退かねえと無理に引出すぞ」と云ふ處へ上手より左官の亥太郎
出來りしが、此跡を見て」

亥「旦那、何うしたのでございます」

文「亥太郎か、友之助を助けやうと思ふのだ」

非甲「また一人來やがつた」

非乙「遣ッちまへ、遣ッちまへ」

亥「やい、乞食、静にしろい、左官の亥太郎が判らねえか」

非甲「やア、豊島町の暴れ者だ」

權「こりや全跡その方達は、此罪人を捉へて何と致す心算だ、御用
だぞ、控へろ」

文「御用と申す事は、能く承知致し居りますが、之なる咎人には罪
なき故、それで止めたのでございます」

權「黙れ、罪があらうが罪がなからうが、お上のお裁きを受けて既
にお仕置と極つた奴だ、よしや罪がないに致せ、此場になつて助
けるなど、は思ひもよらぬ事だ、其處退け」

文「お言葉ではございますが、罪なき者を罪なしと知つて罪に行ふ

一六〇
が、抑も天下の御法でございますか、申すも恐多くござりますれ
ど、當上様には御憐愍の御心深くましまして、賤が伏家の軒まで
も御仁慈の御餘光を受け居りまするに、無實の者をおかばひ下さ
らず、強いてお引立に相成るは上様の御心に反くものではござい
ませぬか』

權『やッ』

文『あれなる捨札の罪人は斯く申す拙者でござる、些か無法ではご
ざいますが、刀にかけても此友之助は一步も動かし申しません、
暫らくお待ち下さい』

亥『乞食奴等も、役人に付きやがって、小癩な事をしやがると承知
をしねえぞ』

森『巫山戯た真似をしやがると、片端より打殺すから爾う思へ』
權『然らば暫時のうち、大目に見て待つて遣はすから、面會致せ』

文『有難うございます、コレ友之助、能く生きてゐてくれたの、お
前が這麼事になつて居るとは夢にも知らなかつた、嗚ぞ難儀を致
したであらう、此文治は自分の罪を人に塗附け、ノメく生きて
居るやうな者でない、蟠作を初め、お村とお崎の三人を殺したは
慥に拙者だ、お前の命は助けるから安心なさい』

友『旦那、何を仰しやいます、お村の心變りを無念に思つて蟠作や
お崎を殺したは私でございます、私が殺したればこそ、此通りの
お仕置になるのでございせんか、夫れに旦那が殺したなど、仰
しやつて、私をお助け下さるお心算かは存じませんが、お上を偽

はる事になりませう、情願か、鈴が森でお仕置になりましたなら
一片の御回向だけは頼み申します』

文『友之助、そりや何を云ふのだ、今までの事を恩に着て身代りに
なつてくれる其信切は嬉しいが、此文治、爾う云ふ事は大嫌だ、
お前が憐う云ふ事になつて居ると知つたなら、立派に名乗つて出
るのであつたが、目指す敵手の蟠龍軒を討漏したれば、彼奴を殺
すまでと思つて今日まで縄目を遁れて居たが、お前の此姿を見て
は、目指す敵手も何もない、殊に母も昨夜急病にて死去致したれ
ば、此世に思残す事はない、罪に罪を重ねてもお前を助けなさや
拙者の義理が立たない、さアお役人衆、お手数ながら此文治に縄
を打つて、お奉行所へお引立ください、それとも亂暴者と見做し

此場に切捨ると云ふお覺悟なら、腕の續くかぎりお敵手を致しま
す、さアお引立を願ひます』

亥『旦那、お前さん何を云ふんです、氣でも異やしませんか、蟠作
を殺したのは俺です、え、お役人様、蟠龍軒の屋敷へ踏込んで三
四人の者を殺したは俺です、へえ、情願か、俺をお縛りなすつて
下さい』

森『おいく、亥太、お前そんな事を云つてくれちや困るじやねえ
か、え、お役人様、蟠作を殺したのは俺でございますから、這麼
者の云ふ事を真に受けねえで、俺をお引立なすつて下せえ』

文『斯様な者の申す事は取上げくださらないで、お仕置の時刻に
も相成りませうから、一刻も早くお引立を願ひます』

友「旦那、那麽事をして下すツちや困ります、旦那、若し旦那」

文「危ない、騒がないで静に致せ、蟠作はお前方の手にかゝる男でない、拙者のする事を見てくれ、さアお役人衆、なにを御猶豫なさる、早くお引立てください」

亥「いえ俺を」

森「冗談云つちや可けねえ、俺を縛つておくんなさい」と互ひに罪を争ふ所へ、上手より眞假名の國藏出來りしが、此體を見るより打驚きて

國「旦那、喧嘩なら俺が敵手になりますから、おツ、森や、亥太、其處を退きねえ」

亥「喧嘩じゃねえ、打縛つて貰ふんだ」

森「お前の知らねえ事だ、下つてゐねえ」

國「笹棒めえ、俺も眞假名の國藏だ、旦那のために打縛られるなら手前達の跡に立たねえ、さアお役人、俺から先に打縛つてくんませえ」

亥「事の理由を知りもしねえて、餘計な處へ出なさんな、さア、お役人、願ひます」

國「なにを云つてやがるんだ、おツ役人、早く俺を縛らねえかよ」
文「えいッ、蒼蠅い奴だ、お前達が如何ほど拙者の身代りにならうと致してくれた處が、三人を一時に殺すと云ふは、劍法の極意を心得て居なければ出來ない事だ、技倆ばかりでない、工夫も致さなければならん、況して夏の夜の明放し、寝たと云ふてもないに

お前達は何うして切込んだか、其申し口によつては、御検視を願つても宜い、何うだ』

亥『何うでも憚うでも其時や夢中で遣つたのです』

文『夢中で人が殺せるか、お前達の親切は辱けないが、人に罪を脊負つて貰つては、拙者の義理が立たない、控へてくれ、いよ、お役人、拙者をお引立の上にて、再應の御吟味を下さるやうお願ひ申します』

権『うむ、聞届けた、外の三人は狂人同様と見做して取上げないが、文治とやら、其方のみを之より直ぐに奉行所へ引立るぞ』

文『有難うございます』と文治しづかに一禮なすが木頭、亥太郎、國藏、森松の三人は思はず落膽とする、之れを時の太鼓にて道具

一轉)

時の御老中たる松平右京亮の家臣たる藤原喜代之助の住宅にて、業平文治の女房お町、上手に手を支へ居ると下手に喜代之助の女房お萱、物憂さ體にて頭を垂れ居る、此模様稽古歌にて道具止まる。

萱『眞個にお氣の毒な事でございますね』

町『阿母様が不意の病氣で、御死去なされた其翌日、又も斯様な事が出来まして、妾は何う致して宜いか、實に途方に暮れましてございます』

萱『姑御様にお別れなすツて其お葬禮の歸途で、文治殿がアノ通り揚屋入りとおなりなされたのだから、跡に残つた和女の御心配、

無かしとち察し申します』

町 『餘りに情けなうございまして、寧ろ死て了ひたいと思ひます』

萱 『喜代之助も左様に申して居ります、文治殿には種々と御恩になり、亦妾と恚うして夫婦になりましたも文治殿のお媒灼でござい

ますれば、何う致しても文治殿の助命の儀を、殿様にお頼み申すと申して居りました』

町 『有難うございます』

萱 『今に歸つて参りませうから奥でも休み下さいまし』

町 『それでは御厄介様でございしますが、喜代之助様のお歸りになりますますまで』

萱 『さア御遠慮なく御休息遊ばしませ』(とち萱はち町を案内し、正

面の襖を開けて這入る、跡すぐに夕暮の梵鐘を打こみて花道より喜代之助、若徒一人と仲間一人を連れて悄然としながら出来りしが、花道にて仲間を先に本舞臺へ遣る、仲間は玄關へ駈來りて)

仲 『旦那のお歸りでございます』(と叫ぶ、奥より萱、下女お鶴を連れて玄關に出来り、喜代之助を出迎ふ、喜代之助は花道に立止ま

りて何をか考へ居たるが) 若 『若し旦那』

喜 『あゝ』(と云つて縦々と玄關へ來り屋内へ入る、若徒と仲間は無

言に下手へ這入る) 萱 『お歸り遊ばしませ』

喜 『うむ、唯今歸つた、不在のうち誰か参つたものはないか』

覺 『文治殿の御家内が見えられました、貴卿のお歸りを奥の間でお待ちになつて居られます』

喜 『なに、お町殿が見えられたか』

登 『文治殿が今度の御災難に附いて、何やら貴卿にお頼み申したいと仰しやつておられましたれば、鶴や、之れへお呼び申して來るが宜い』

鶴 『はい』

喜 『こりや待て、その頼みと云はれるは、若し文治殿の助命の事ではあるまいか』

登 『仰せの通りでございます』

喜 『お町殿が態々お出なさるまでもなく、御恩になつた文治殿の事

なれば、江戸橋より町奉行の役宅にお引かれなされしと聞くや否や、舊恩に報ゆるは此時と當月が我君のお月番なるを幸ひ、御前に伺候して種々とお頼み申したれど、私ごとのため天下の御法は枉げ難しとの仰せ、お言葉かへすは恐れあれど猶も押して今も今、くれぐれ助命の儀をお願ひ申し歸つたれど、君の御様子にては兎ても助命は難かしからう』

登 『助命が叶はぬとあつては、お町殿も嘸かしお力を落さるゝてございませう』

喜 『お町殿よりも此喜代之助は、文治殿に相濟まねば、愈々助命の儀叶はぬとある其時は、我が君に申譯なけれど文治殿への分疏に』
登 『何と遊ばす御景見でございます』

喜 『いや葦、假令如何なる事があらうと、汝は武士の妻なれば必ず未練を出すまいぞ』

一七二

葦 『それでは若しや御切腹を』

喜 『義のために命を捨てるは、武士の常じや』と云ふ此時、花道より二幕目の中原岡右衛門、仲間一人を連れて出来り

岡 『頼もう』と案内を乞ふ、之にて下女お鶴、玄關に立出る

岡 『藤原氏は御在宅でござらうな』

鶴 『はい、今方も歸り遊ばしましてございます』

岡 『それでは、御免ください』と岡右衛門は屋内に入る

岡 『藤原氏、日々のお勤め、お疲れでございますせう』

喜 『お、中原氏でございますか、能くも出くだされた』

葦 『その後は御機嫌よろしくても目出度ございます』

岡 『いやお庇蔭で身躰ばかりは達者にござれど、些と目出度ない儀があつて罷出ました』

喜 『なんと仰しやる』

岡 『お氣の毒にござれど、天下の御法を軽く見て文治殿の助命をお願ひなされし故、他の者への見せしめ且つは他藩への聞えを憚かり、明日より出仕を御遠慮なさるべしと我が君の仰せでございまするぞ』

喜 『なに閉門、それでは文治殿助命の儀もお聞容れは下さいますませ』

岡 『申すまでもなく、文治殿は切腹の由にて其お裏判も明日据はる』

とか承はつて居ります』

喜 『あれまでも頼み申せしなれば、既に此身の閉門申しつけらるゝは覺悟の前でござつたが、文治殿は迫めて遠島ぐらゐに御滅刑下さるならんと思ひの外、愈々切腹と極りましたか』

岡 『我が君のお裏判を遊ばすまでは、確に判りますすまいが、兎も角も切腹とは極つた様子、舊日の義理にしがらむ貴殿の御胸中をお察し申し、拙者よりも文治殿助命の儀をお願ひ申さんかとも存ぜしなれど、何分に御前の御立腹容易ならざれば、反つて貴殿の御身にまで害を及さんかと存じ、態と差控へしが、最早や斯うなつては詮ないこと、文治殿の非運とお諦めなさるが宜し』

喜 『固より人を殺せしは大罪に相違なけれど、追劔夜盗の類ひと違

ひ、一片の義侠より致せし事なれば、其邊を御憫察くだされ、迫めて遠島にでもなし下さるやうお願ひ申せしなれど、斯くなり果ては最早や致方もござらぬ』

岡 『唯だ此上は、御遠慮の解くる日をお待ちなされ』

喜 『閉門御免になる其日まで此喜代之助の一命が』

岡 『えッ』

喜 『いや、お使ひ御苦勞にございます』

岡 『さらばお暇いたしませう』

萱 『御免くださいまし』と岡右衛門は愁傷の体にて徐々と花道へ這入る、同時に下女お鶴は正面の襖を開きて這入る、喜代之助は思案に耽りゐたるが敦圀あらく肩衣を跳退けて』

喜 『萱、唯今中原氏の云はれたを聞いたであらう、我君には此身の願ひをお取上げ下さらぬばかりか、遠慮申附けられて、明日より出仕かなはぬと相成つては、文治殿の助命も全く爰に絶果てた、君には不忠また汝には氣の毒なれど、大恩うけし文治殿に此身の義理が相立たねば、先刻も申した通り我れなきものと諦めよ』

喜 『それでは愈々御切腹を』

喜 『此場に於て果る所存だ、決して未練な振舞ひ致すな』

萱 『左様でもございませうが、迫めてお裏判のすはる夫れまでは、私を不憫と思召し下さいまして』

喜 『えッ、止立いたすと夫婦の縁も切つて了ふぞ』

萱 『そりや餘りお情けない』

喜 『えッ、蒼蠅いッ』と云つて喜代之助はお萱を膝下に捻伏せ、刀を抜放して切腹なさんとす、途端に奥より以前のお町駈來りて其手に絶り)

町 『藤原さま、其御短慮はお止まり下さいまし』

喜 『うむ、お町殿でござつたか、若し文治殿に一目たりともお逢ひなさらば、現在お月番御老中の家臣でゐながら、文治殿の助命をなし得ぬ身の分疏なさに、切腹致したとお傳へ下され』

町 『まゝ、お待ち下さいまし、先刻よりの次第は失禮ながら次の一間で承はつて居りましたが、貴郎の御心配くだされた甲斐もなく良夫の愈々切腹となりましたは、其身の非運でございませうれば、情願か御切腹ばかりはお止まり下さいまし』

喜 『我願ひの叶はぬ時は、最初より斯くと覺悟を定め居りましたる拙者にござれば、假令なんと仰しやるも其初一念は翻へし申さず止立は御無用に存ずる』

町 『でもございませうが、浪人の身として切腹とは分に過ぎたる御待遇、良夫もそれを身の晴れに成佛致しませうなれば、情願か御切腹ばかりは』

喜 『なんと仰しやるも文治殿へ分疏なさの此覺悟、邪魔なし下さるな』と云ひ放つて、お町を突退け素早く刀を腹に突立てんとす折しも、此以前より密と戶外に立つて様子を窺ひゐたる松平右京亮、連れたる二人の近習と共に縦々と入來りて)

右 『喜代之助、待て』

喜 『やツ、御前様と』(慌て、居住ひを正し、お萱と共に平伏す)

右 『そらの切なる願ひによりて文治の命を助けんと思へど、私情によつて天下の大法を枉ぐるは、役柄として兎ても出來ざる事なれば他の者に知られんを恐れ、亦は他藩への聞えを憚り態と立腹の上、先刻岡右衛門を以て暫時の遠慮申附けたが、文治とやらは助け遣はずぞ』

喜 『えッ文治をお助け下さいませうか』

右 『明後日待つて赦免いたせば、其切腹は思止まれ』

喜 『は、ッ有難う存じます、コレ萱、お町殿、御前様のお情にて文治殿の命は助かつたぞ、早くお禮を申上げぬか』

町 『はい、妾は文治の妻、町と申す不束者でございませうが、有難

う存じます』

萱 『文治殿ばかりでなく、良夫の命も助かりましてござります、御前様、お禮を申し上げます』

右 『そればかりではない、汝の話した蟠龍軒とやらは海賊となつて越後あたりの沖合を徘徊なすよし、或者より聞き居れば、此事を文治に傳へて取らせよ』

喜 『何から何までのお心付け、恐入りましたござります』

町 『それでは良夫の御赦免を待ちまして、越後に赴いたる上父の敵蟠龍軒を討取る事に致します』

萱 『これも偏にお情厚さ御前様の御恩』

喜 『お町殿、死しても忘れてはなりませんぞ』

町 『勿躰ない、なんのお忘れ申しませう』

右 『うむ、嬉しいのか』

喜 『憚ながら、之が嬉しうなくて』と両手を支へるが木頭

喜 『なんと致しませう』と打喜ぶ、お萱もお町もまた愁眉を開く、こなしにて幕

(五幕目)

新潟沖の難船に悪漢の毒殺

登場人名

業平文治、女房お町、船頭吉藏實は海賊大蛇の吉藏、船頭久治實は海賊狸の久治、蝦夷人一名、

空黒く浪暴き新潟沖の海上にて、苦葺きの荷足船に船頭吉藏實は大蛇の吉藏と、船頭久治實は海賊狸の久治の兩人、疲れし體にて舳先の板間に胡座を組みながら辨當を喰ひ居る、此模様浪音にて幕開く、

久「おい吉藏、こりやお前、客人の辨當じゃねえか」
吉「爾うよ、客人の辨當だが、先刻の暴風雨で死たやうになつて居

るから、幾ら何だつて、喰やしめえと思つたから取つて來たのだ」
久「あれだけに酔つて居ちや、甚麽者だつて喰へやしねえ」
吉「だから取つて來たのだが、後で斷つて置きや宜いだらう」
久「何しろ、水を汲出すのにスツカリ身體を疲らせて了つたから、腹でも太くしなみや兎ても持たねえ」
吉「最う二三本欲しいやうだ」

久「相變らず能く遣るねえ」と云ふ時、苦を上げて業平文治出來り
吉「おや、旦那でございますか、少しは御氣分が癒りましたか」
文「船には元來弱いものだから、少し浪が高くて酔ふのだが、先刻のやうな暴風雨を喰つては、兎ても命が助かるまいと思つた、然し氣分は癒つたやうだ」

吉 『そりや結構でございました』

久 『御新造は何うなさいました』

文 『苦し紛れに寝たまゝだが、今眼を覺まさせるは宜くないと思つたから、其まゝに寝かせてあるのだ』

吉 『それが宜しうございませう』

文 『だが暴風雨は、最う來なからうね』

久 『いや判りませんよ、此空鹽梅じや今に亦來るかも知れませんか』

文 『困つた事だの』
吉 『何しろ、大分に流されたやうですから、おい久治、一息出しねえ、兎ても往けねえぜ』

久 『うむ、合點だ』と久治、吉藏の兩人は、船を漕がんとせしが、

久治は腹の痛み思入れにて)

久 『おッ痛え、馬鹿に腹が痛くなつて來やがッた』

吉 『何うしたのだ、困つた事だ、旦那、お藥を持つてお出になりませんか』

文 『幸ひ熊の膽を有つてゐるから、之れでも飲まして遣らう』と文治は、腰の印籠より熊の膽を出して飲ませる)

吉 『有難うございます、おい久治、睨りしろ。』

久 『あゝ苦しい』と云ふうち久治は口より血を吐出して、悶え苦しみが遂に落入る)

吉 『やッ久治、到頭死で仕舞ツたか』

文 『死だのは致方ないが、不思議に思ふは此死際だ、血を吐くとは

唯事でないぞ』

吉 『左様でございますね、食當りでもないやうだし、何うして這麼に急に死だか理由が判らぬえ、然し、貴卿のお寝みなすツて在らツしやるうちに、餘り働いて腹が北山と來たものでござりますか
ら、旦那の辨當を無斷で戴きましたか、若しやあの辨當が』
文 『なに拙者の辨當を喰つて、間もなく此有様だと云ふのか』
吉 『左様でございます』

文 『ふむ、それでは若しあの者が、拙者夫婦を害せんとの下心にて毒を入れたる辨當をくれたのであるまいか』
吉 『旦那、あの者と仰しやいますが、それでは此辨當は宿屋からくられたのじゃございせんか』

文 『船の出るのを待つてゐるうち、圖らず合宿になつて此船を世話してくれた商人躰の者より貰つたのだ』

吉 『なに、あの旅商人から、了つた』

文 『仕舞つたとは』

吉 『我手で盛つた我が毒に、旦那、俺も命を亡くしました』

文 『なんと云ふ』

吉 『悪い事は出来ねえもんでございます、實は俺共は海賊の手下でございりますが、あの旅人に姿をやつして居たのは、小頭の灘五郎と云ふ者で、貴卿を親船へ連れて往つて懐中にある金と、大小衣服を剝取て、殊によつたら貴卿をば手下にするか、殺すかしてと相談しましたが、貴卿が宿屋を出ておいでなされる時に、手怖い奴

と思つたから、毒を入れた辨當を差上げたのでございます、夫とも知らず腹の減つた苦しませ、うっかり食つたが運の盡き、之れが因果應報と云ふのでございませう、旦那ゆるしておくんませえ、俺もソロ／＼腹が痛くなつて來やした』

文『なに、毒が廻つて來たか、然し、汝の罪は汝の懺悔で許してくれるが宿屋を時る時にあの旅商人は怪しい奴と思つて居た、さア吉藏とやら、假令死でゆくにせよ、此熊の膽を飲むで暫し苦痛を助かつて見よ』

吉『戴いたツて駄目でさア、苦しい、眼が眩んで來て旦那の顔が見えなくなつて來ました』

文『生前に何のやうな悪事を働いても、臨終の際に其罪を懺悔すれば罪障消滅すると云ふから、悪念を去つて靜に命數の盡さるを待

て』

吉『有難うがす、俺も初めて發心しました、死ぬる命は惜みません情願か、樂に成佛の出來ますやう、念佛の一つも唱へて下せえまし』

文『殊勝な心掛だ、慥に後生を吊つてやるぞ、だが汝の親分と云ふ海賊は、何處のもので名を何と何ふ』

吉『産は遠州の掛川在で名前を鯨の源太と云ひやす、亦俺も根からの海賊じやアございません、元は房州の漁師でございましたが、偶した事から其源太の手下となり、女で御座れ、金でござれ、目附次第に騙したり剝取つたりして親船へ持運び、女の好いなア頭

の妾、また頭の氣に入らねえ女は、寄て集つて勝手にした上、尾張か神戸あたりまで連れてゐて賣飛ばすと云ふ寸法で、悪事に悪事を重ねるうち、三月以前から一人の劍術遣が来て、頭を毒殺した上其子分を手下に從がへ、以前に優る亂暴狼藉今じや其侍が頭で、親船は始終越後邊へ繫つて居りやす、あゝ苦しい、旦那、早く殺しておくんせえ』

文 『待て、耽りしろ、今汝の云つた二度目に來た劍術遣の名は何と云ふ、今の頭の名前を聞かせよ』

吉 『たしか大伴蟠龍軒と云ひました』

文 『さては愈々蟠龍軒に相違がない』

吉 『旦那、御存でございませうか』

文 『なに、知つてゐる譯でもないが、爾うして子分の重立つた者は』

吉 『頭の連れて來た阿部忠五郎だの、和田だの、秋田だの、お淺とか云ふ尼までが交つてゐるやうでございませう、アツ苦しい』

文 『これ、氣を慥に持て』

吉 『兎ても駄目でさ、旦那、ね、ね、念佛を』と云つて吉藏もまた七轉八倒の苦みをなしたる末、遂に血を咯きて落入る。

文 『最早や成佛いたしたか』と文治は合掌なす、折しも町出來りて。

町 『旦那様』

文 『うむ、眼が覺めたか』

町 『敵の在所は愈々越後あたりと極りました』